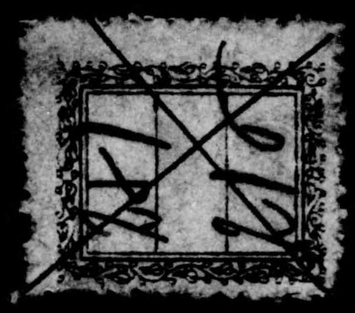
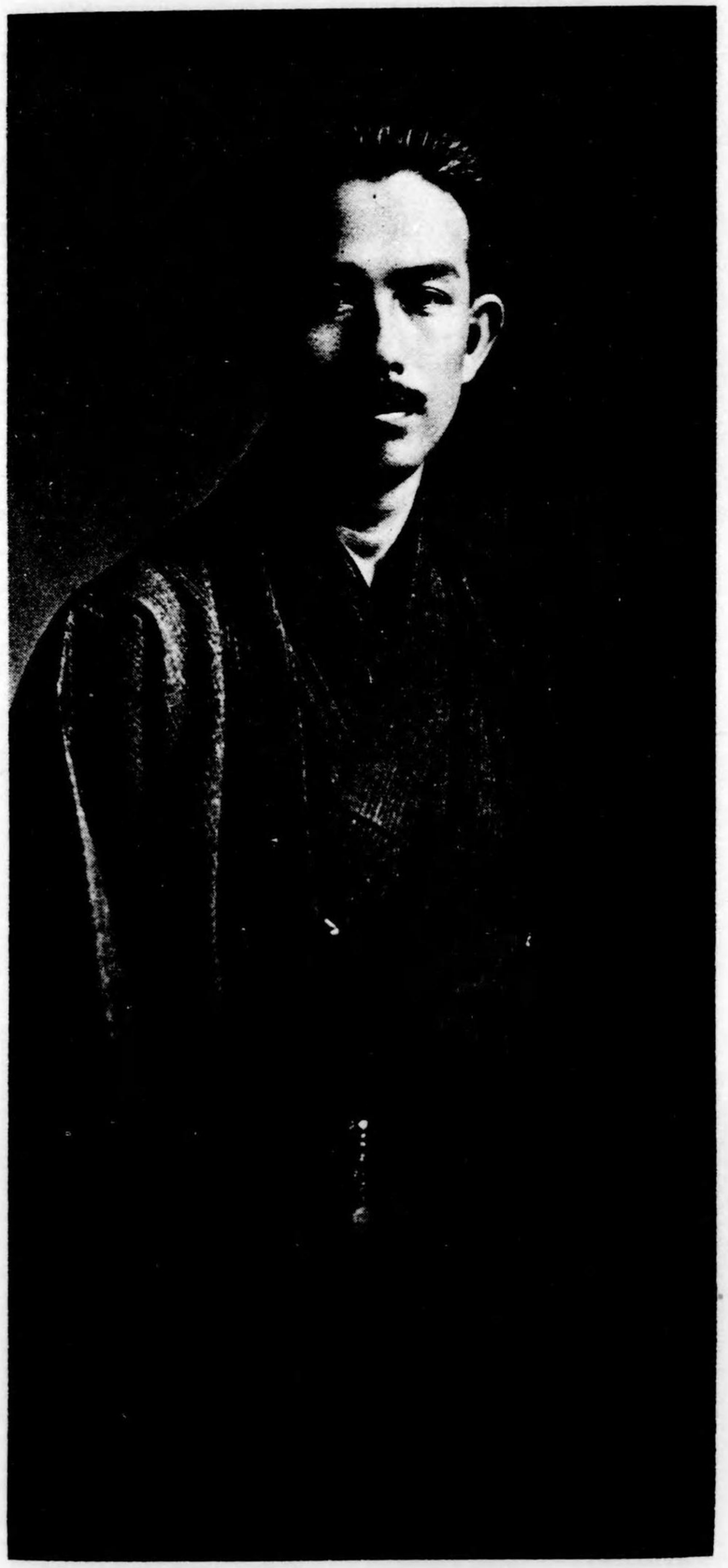
投函



生命の炎

特100
425



著者

生命の灸

古江椢堂著

大正
8. 8 4
内交

序

▲精神的集團櫚會の事業は私が畢生の心血を傾注せんと欲する事業である。而して　會の一事業たる雜誌『乃木式』は亦私が血をインキとし皮を紙として發行しつゝあるものである。私は乃木將軍の生前一面の識を辱くするを得ざりしものであゝ。しかも將軍の死によりて痛烈なる刺戟と至大の感化を受けたものの一人である。

▲河内の國は小楠公を祀る四條畷神社を距る十數町、北河内郡友呂岐村字平池と云ふ十戸の邑に、大正四年の春寒き一夜、爐火を圍んだ二人の貧しき青年の默契によりて、櫚會（くのきくわい）と稱する集團の核子（たね）が芽を吹いた。爾來私共は或は行脚に、或は講演に、或は文筆によりて同志の提携に努めた。故將軍の高風に私淑し其の高人格を敬慕する同志の集團は、今や全國各地に四萬人を算ずるに至つた。

▲雜誌『乃木式』誌上に掲げたる記事を今茲に摘錄して世に公にせんとするは、雜誌乃木式はもと櫚會員に限り頒布せるものなるを以て之を一般江湖に示さんが爲めである。

著者　古江櫚堂

生命の灸

古江椢堂著

人生と清書

人生は書損(かきそん)じを許さない。それ自身清書(せいしよ)である。今日手習(てならひ)して明日清書すると云ふものではない。今日清書すればそれは永久に書き直しは出來ない。今日生活すれはそれは再び今日を生きかへることは出來ない。今日の清書を如何に立派に書き上げ、今日の生活を如何に充實すべきかゞ人生の使命である。

眞人生活

唯生きて居ることが無上に嬉しくなければならぬ。唯生きて居ることが、飯を食ふことが、仕事をすることが、歩くことが、語ることが、學ぶことが嬉しく喜ばしくなければならぬ。生の喜悦、生の感謝、これが眞人生活に入る第一歩である。

生活の充實

座つたり臥たり轉んだり腰掛けたり食つたり飲んだり話したりする時間が我等の一生の大部分である。この時間をどうするかと云ふのが大問題である。修身講話の一時間、禮拜の三十分、氣を付けの五分間だけを問題にしたつて仕方はありませぬ。

心身一如

讀書や研究は獨り精神のみの滋養ではない。身體の滋養ともならねばならぬ。勉強すれば益々身體衰弱し、讀書すれば益々顏色蒼白になるやうでは何處かに間違つた處があるからだ。要は心身を以て書を讀むの呼吸を知らない爲めである。

游於藝

働きの極致は遊びである。職業に遊ぶやうにならねば駄目だ。古人の所謂「游於藝」とはそれだ。學藝や職業に追ひ廻はされて働いて居るやうでは、人生の眞生活味に觸れたものではない。

良僕は頑健

身體は良心に服從する事の出來るやうに強健でなければならぬ。由來良僕は頑健でなくてはならぬ。

身體の强弱

身體は弱ければ弱いほど命令し、强ければ强いほど服從する。

身體の缺陷

元來我等が酒や煙草を欲しがるのは身體に或る缺陷があるからである。卽ち或習慣等によつて身體の何處にか病的な不自然な點があるからで、其缺陷を充たす爲めに此等の興奮物を必要とするのだ。此の缺陷がある間は到底酒や煙草を

禁ずることは望まれない。それは禁ずるのが不自然で禁じないのが自然であるからである。先づ其の缺陷を癒やすことが必要である。缺陷が癒やさるれば禁酒も禁煙も自らにして到る。また食物にしても體に良い物が嗜きにならねば不可ん。こうなれば實に難有いものだ。心の欲する處に從へども其の矩を踰へずと云ふことになるのだ。

健康で雀躍

たゞ靜座し、たゞ呼吸し、たゞ運動するといふ事が愉快とならなければならぬ。吾々の健康は病弱を避けるに止まらず、元氣が充ち溢れ、雀躍せずには居られない狀態に進まねばならぬ。

藥に慰めらるゝ人

多くの人はよく藥を飲む、飲む筈だ。眞に生活する事を知らないで唯生きてさへ居ればよいと云ふ樣な懶惰や仕事も出來ない弱蟲にとつては藥ほど心の慰みになるものはないからさ。

一意專念

踵に穴の開いた韈が氣になるやうでは折角の御馳走が身につかぬ。ネクタイが歪みはせぬかとそればかりを氣にしてゐては折角の御說敎が耳に入るものではない。

善き生

ソクラテス、プラトンの語を籍りて曰へば『我等の最も尊む所のものは生にあらずして實に善き生である』たとい鼻は曲りても息さへ出ればよいと云ふ根性になつては沙汰の限りである。之れ實に生の侮蔑、生の否定である。

運命

世の中は何時も惡賢い奴が馬鹿正直な者をいぢめて居るが。運命と云ふものは又皮肉なもので、あべこべに馬鹿正直な者をして惡賢い奴を征服せしめる。

微温湯

生温い風呂に這入ると、何時までも浸つては居れぬが、それとて上るのは肌寒い心地がする。その不愉快な心持たら無い。遊蕩的生活を脫することの出來な

い人の落着かない不愉快さが恰度それだ。

妻

何よりもよきものはよき妻である。何よりも惡しきものは惡しき妻である。

上戸

盜泉の水が若し酒であつたら世の所謂上戸連なるものは皆爭つて飲んだことだらう。

犧牲的奉仕

如何に修養を積み、如何に自己を造つたからとて自己より高き或者に一身を献じて仕へ奉る所の覺悟がなければ徒爾である。其の自己より高き或者は神なりとするも可なり、君父なりとするも可なり、國家なりとするも可なり、此の犧牲的奉仕によりて我等は初めて精神的王國に入ることが出來る。

よいさよいさ

淘宮術の開祖横山丸三翁の歌に『淘宮は堀りぬき井戸と心得て同じところをよいさよいさ』と云ふのがある。吾人の修養は堀ぬき井戸の「よいさよいさ」の努力より外にあるものではない。自分は酒で失敗ると思つたらそこのところを「よいさ〳〵」。自分は女で失敗ると思つたら、そこのところを「よいさ〳〵」。

肩空

維神道話の一節に曰く、「大木を荷ふに其の人數が五十人なれば五十人荷ひ上げ

た以上誰も彼も精不精なく力を出さねばならぬ。若し其の内一人横着な仁がゐて肩空をするやうの事が有ると忽ち其相棒の者は腰が屈み足がねぢれる、さて一人が屈むと又その隣りの者もへこむ。それから段々屈むと云ふと頂上揚句のはてには大木がすわり込んで動かず、爰に至つて總勢五十人の難儀となる」。……とある。全く此の通りだ。此節共同の事業や社會的事業など成果の擧がらぬもの多いのはこの肩空を極め込む奴が多いからである。

囚はれん哉

一方の教を奉じ一家の言を信じ一事に熱中すれば、今の人之を稱して某々に囚はるゝと云ふ。それ教を奉ずれば教の中の民となり、言を信ずれば言裏の命に

從ふ。人の信奉するところは正に斯の如くあるべきである。此を囚はるるとは詭辯である。釋迦は法に囚はれ、耶蘇は神に囚はれ、孔子は道に囚はれ、聖帝は民に囚はれ、忠臣は君主に囚はれ、孝子は父母に囚はれる。それ囚はれずして何んするものぞ。あゝそれ囚はれずして何んするものぞ。今の世貞操に囚はるゝの妻何ぞ少き、服從に囚はるゝの徒弟何ぞ少なき、孝道に囚はるゝの子女何ぞ少なき、忠義に囚はるゝの丈夫兒何ぞ少なき。囚はれんかな、囚はれんかな。

教を奉ぜよ

自己の流露、個性の展開なんと云ふことも考へ方によつては惡いことでなく妙

處の存ずることであるが、毫髮を過れば百害之より生ず。寧ろ謙抑學を爲し敎を奉ずるの態度を學ぶべきである。

萬全の道

自ら省みて自己を眞に圓滿精美の人格なりと信ずるにあらざるよりは、妄に自己の流露個性の展開なんど云ふことを夢みずして眞に刻苦修治して圓滿精美の境に入りし人、卽ち聖賢明哲の敎を受け道を奉じて行くのが至當であり萬全である。

高山彦九郎

强賊を一喝して慴伏せしめた高山彦九郎も其未だ劍を學ばずして自ら負みし時、江上關龍を斬らんとして關龍の爲めに笑殺され憤激暗啞すれども刀を拔くことが出來ず、遂に節を折り、劍を學んだではないか。我流で何が出來るものでない。

批評

他人の善的な企てに對して、一とひねりひねつて皮肉な見方をしないでは氣のすまないある種類の傍觀者がある。他人の企てを批評する權利は、それを企てる人と同等以上の熱意を持つた人にのみ許されることだ。

蕩人

今の世、其の人と爲り奸惡嫉むべきにあらず、暗愚無智なるにあらず。而も平

生確實を缺くもの多し。これ所謂蕩人なるものである。この類の人何ぞ多きや。

德香道光

香木をたくに其のまことの芳しき氣は煙の未だ立ちのぼらざるに迸り出づるものである。人の心の匂もまた然り、相見て口未だ語らず、手未だ把握せざるに德香道光の我を襲ふものあるは德の人である。

鐵則

人生は酒色に耽り歡樂に醉ふところではない、ないのではない、さう云ふことの出來ないやうに出來て居るのだ。優勝者となるか劣敗者となるかと云ふ選擇を一つ爲した以上は殆んど後は鐵則の如くに定つて居る。

地金

眞鍮を眞鍮だとして通用さすれば眞鍮相當の侮蔑も受けねばならぬが、眞鍮相當の價格を拂はれるのは間違いの無いことだ。

現代人の苦悶

鍍金を純金に通用させやうとする切ない工面。これが現代人の苦悶である。

一理

棋を試みて知る、七情の騷げども益無く一理のたゞ賴むべきを……。

口

會者は忙せず。

天趣

花を養ひて芬芳を致せば蝶おのづから到る。蝶を招くの意無きに蝶來るところに無限の天趣の我を攝するあるを覺ゆ。

仕事

人の理想は自適を放れて奉仕へ移り行く。仕事と云ふことは嘗ては唯貧民の呪咀に過ぎなかつた。ほんとうの紳士は仕事しないで生活の出來る人だと考へられた。王様は自分に仕事をせずとも多數の臣下に仕事をして貰へるから羨まれたものであつた。今の世にあつて仕事をせぬほど、仕事の出來ぬほど、辛いことがあらうか、悲しいことがあらうか、愚かなことがあらうか。

恩愛

酒少く兵多し、酒を河水に投じて衆兵と共に飲んだ將がある。流水を掬して之を飲んだものは、もとより酒の香には醉ふべくもないが、而も其の不可言の恩愛には淘然として醉はざるを得んではないか。

同情の強請

一體自分ほど不幸なる者は無いなどゝ思つてるのは一種の自惚だ。自分を以て第一の不幸な者と思つて居るから何人からでも同情を得やうとする。不幸の押賣、同情の強請は女郎根性、乞食根性、孤兒根性だ。

生活難

生活難々々々と口癖に言ふが眞實の生活難は君に無い筈だ。君のその馬鹿らしい弱點と虚榮と虚僞の生活から生ずる生活難を君自身でなくて誰が解決して呉れるものがあるか。

不得要領

不得要領を以て處世の要訣だと稱し、之に倣はんとする者が多い。愚を蔽ひ奸を誤魔化さんとするの術だ。本來の性質なれば兎も角學ぶべきことではない。

小の大

クレオパトラの鼻五分低からんには世界の歴史は幾多の異れる變化を來したであらう。淀君の眼尻三分も上下したらんには豊臣の天下或は三代にして亡ぶものではなかつたかも知れん。セルビヤの一兇漢が放つた短銃の一彈三尺を反れたら歐洲の大動亂は其端を開かなかつたのかも知れん。これ小か、これ大か、人生日常に於ける修養の基礎は小の大を知るにある。

婦人の力

中村敬宇先生は死ぬ時に夫人を呼んで『よく學問をさしてくれた』と感謝された。婦人の力はこうした隱れた所にある。

前科者

前科者とは改悛した者に取つては『自叙傳の著者』と云ふことに過ぎぬ。人は或意味に於て皆前科者である。問題は改悛したか否かであつて前科の有無は論ず

るに足りない。

嘘吐き

彼は前科者であると云ふより、彼は嘘吐きだと云ふことが厭ふべきことである。前科者は過去の犯人であつて、嘘吐きは現行犯である、或は將來の犯人である。

葬られる人

他人の勞働に由り、他人の恩惠に由り、祖先の遺産に由り、奴隷的屈從に由り、資本主義的暴利に由つて衣食する人、これを時代遲れの人と云ふ。こうした人達が葬られる時代は近き將來である。

一以貫

物を賣るのに一價主義、話をするのに一舌主義、事を行ふのに一貫主義、女を戀ふるに一女主義。

三角術

金持になるには三角術を應用しなければならぬ。——義理をかく、人情をかく、恥をかく、これで三かく。

佛の花

お寺の佛檀に供えた花も佛樣には背を向けてある世の中である。

買賣

物を買ふのに撰つて取つて貶して値切る客がある。物を賣るのに、だまして譽

めて煽てゝ懸値を云ふ商人がある。

正　　賣

商賣の秘訣は正賣にある。

成金諸君へ

莊子に「偃鼠河に飲むも滿腹に過ぎず」とある。成金諸君ちと吐き出してはどうだ。

持　　久

度々河岸をかへては魚は鈎れない。

有　　材

無くてならぬ人となれ。

細　　君

美しい細君は寶玉である。善き細君は寶物である。

嗜　　好

天才とは持つて生れためい〳〵の嗜好である。嗜好のある所に天才が潜んでおる。

當世主義

ペコペコ主義、ニコポン主義、面從腹非主義、長いものには卷かれ主義、世辭で丸めて浮氣で揑ねる主義、あたらずさわらず通り抜け主義、生きたか死んだ

か海鼠主義、男か女か両性主義、右も左も股膏藥主義、これが今の世の世渡り上手の金科玉條である。

努力の眞諦

私の努力には不純な點がある。私は常に自己に服せざる何物かを感じて、そして鐵鞭を以て之を威壓し乍ら事に從ふの景象がある。私は自ら努力し、努力せんとして居ることを忘れて、そして私の爲せることが自からなる努力であつて欲しい。私は未だ努力の眞諦に達せず、努力の醍醐味を解せざるを遺憾とする。

跣足

足跣になると平民主義の難有味が分る。

芝居見物

お白粉が剝げはせぬかと氣にばかりしてゐては、千両役者が演ずる悲劇にも涙の出るものではない。

失業者

失業者と云ふのは身勝手で自己の要求ばかりを考へて、自分を使ふ人の要求を考へぬ人である。

克服健鬪

吾人の前には屈服と克服の道がある。屈服屈從の道は、人間尊貴の蹂躪、人間價値の否定、從つて全人生の破壞否定に外ならぬ。吾人の取るべきは卽ち克服

健闘の道であらねばならぬ。

正直

正直ほど厭味の無いものはない。

道德と權利

謙抑、平和、慈悲、犧牲は人類究極の理想であらねばならぬ。權利の主張など云ふことは、只正當防衛の場合に、今日の人類の道德の程度では止むを得ず、之を主張せねばならぬのである。權利の主張に消極的なのはそれだけ道德的に積極的なのである。

飯加減

修養とは手近く説明すれば三杯食べたい飯を二杯半で濟ませて置くことだ。二杯の飯では飽足らぬ、三杯食へばあとが不愉快だ。二杯半を食ふことが中々六かしい。然しそこに修養の味がある、飯の食加減を誤まらぬやうになれば人間も或程度までの修養が出來たと云ふものだ。

方圓

人間は角があると世の中に轉がつて行くのに骨が折れて損だ。丸いものはころ〳〵とどこへでも苦なしに轉がる。しかし轉び過ぎて墜落するのは丸いものに限つて居る。

守愚

柔術の奥の手は敵の力を利用して敵を斃すのである。此の奥の手を知つたものにかゝると才人は才で斃され、智者は智に斃され、富者は富に斃される。だから才人は才を隱し、智者は智を蔽ひ、富者は富に奢らぬ分別が肝心だ。『愚を守る』とは仲々の思案だ。

因果

淫奔娘が淫戯をして懐妊した。原因は淫戯でも結果は眞劍に子を産まねばならぬ。因果の法則は『原因の如何に係らず、結果は必ず眞面目に責任を問ふものなり』

鈍根

悧巧を捨て、虚榮と僞善を封じ、鈍と根とを金科玉條とせよ。

力と愛

正宗の名刀を執つて見よ、力の表現と云ふよりは寧ろ桑和な愛の光が切ッ尖から流れて居る。村正などは殺氣を現はしてゐる許りであるが、正宗となると眞に殺人劍活人劍の二方面が現はれて居る。人格の極致は力と愛とに到達せねばならぬ。

首鼠両端

自轉車にブッ付かる奴は皆首鼠両端を持する奴だ。

恐懼

我恐懼し我修省し我努力して已まず、必ずや吾が一擧手一投足の間に天佑の漲り溢るゝものあらん。

志す處

商人が貧乏したらお耻しいことだ。公人にして蓄財を心掛けるとあつては笑ひ草だ。各々其志すところにあらざればなり。

紳士的

禮義的に作法的に紳士的に不正不義を行ふことも現代人の發明したことだ。

忠告

涙を以てせぬやうな忠告は見合せたがよい。

退屈

働きの嫌いな人は退屈を嫌はない。

無遠慮

讃める人は非難する人より無遠慮な人だ。

無邪氣と狡黠

無邪氣の衣物を着て狡黠の腹卷をしめる奴がある。

議論

議論は一種の競技である。勝負は分るが善惡も正邪も分らない。

趣向

見慣れた風景でも股倉から覗いて見るとまた格別の趣きがある。物事に飽くのは趣向を考へぬからだ。

正　直

世の中に正直が勝たねば外に勝つものはない。

親　切

世の中に親切が功徳にならねば功徳と云ふものはない。

□

肉を磨けば靈が光る。

□

肩を張るな腹を張れ。

□

神に通ふの途は唯それ冥想か。

□

今日の我が空虛であると昨日の我が侵入する。

天　才

吾人は天才の可能性だ。潜める天才に付いて疑ひを抱くことはない。或暗示に感ずる時無中有を生じ死中活を生ず。此潜める天才を自覺せざるものは修養を知らず。

善芽を折るな

善芽を折ると云ふことは最も悪いことだ。他人が眞面目な話題を出した場合それを茶にしてはならぬ。例令ば一人が『お互に一日一善を初めやうぢやないか』と云つたとき『僕は一日一膳では足りない一日十膳位食べたい』などと云へば折角の問題は茶にされて消滅してしもう。日本人には得てこうした缺點がある。

寛恕

他の過失に對しては、それを速に無視することが最も聰明な社會的道德である。自分が同じ過失を再びしないものと悔ゆる心があるとすれば、他人にも同じことが想像せられねばならぬ。

取越苦勞

晝の心配を寢床に持ち込んではならぬ。

利己主義

畜生の手は手前の方へ搔き寄せるだけの作用を有つて居る。近頃の人間には此の手の手合が多い。

惡友

彼等の間には取交す眞の友情はない。その代りに取交す酒盃がある、取交す利益の問題がある。

衆心收攬

そも〳〵力は衆の力を併せた力より大なる力は無く、智は人の智を用ゆるより大なる智は無い。衆の力を併せ、人の智を用ゐんと欲せば、衆の心を收攬しなければならぬ。

運命

およそ世の中に自己の運命が、生誕(せいたん)の日の十干十二支や九宮二十八宿などにより前定し居るものと信じ、そして自己の好運ならざるを嘆ずる者ほど無智なものはない。何となれば斯の如き薄弱貧小な意氣や感情や思想こそ、是れ直にその不運不幸を招致する主なる原因であるからである。

思想

水道の水は其の水源地以上の高さに導くことは出來ない。人間の活動も其の湧出の源(みなもと)たる思想以上に出づるものではない。活動の標準を高めやうとすれば先づ思想を養い之を高めねばならぬ。

人格の表現

事業の尊き所以は之に當る人格の表現であるからである。又事業其物が人格に及ぼす力あればこそである。事業の爲めに人格を傷(きづつ)けるやうでは事業として何の尊き所はない。人を措(た)いて事業は無く人の上に事業は無い。

強者弱者

強者の不德は力の誇示(こし)であり戰である。弱者の不德は愛であり平和である。愛

は平和は強者の德にして、正義は戰は弱者の德である。

衛生學

衛生學は科學と云ふより寧ろ道德に屬するものである。節制と勞働、こればかりが人の醫者である。

不精者

精農は月日の立つを悅ぶ。流年を惜むは不精者の自然に被る懲罰である。

眞理

誤解を徹底せしめた其刹那々々に吾々は眞理を握る。

智者

智者は多く寡言である、知れ切つたことは愚者でない限り饒舌る氣乘りのするものでないからである。また未知の問題に付いては彼は常に忠實な聽者の態度を執るからである。

怒

怒りは多くの場合、他人を害ふよりも寧ろ自己を害ふことが大である。

温故知新

古に倣ふは必ずしも妙ならず、故を温ぬるは未だ必ずしも益無くばあらざるなり。己を用ゐるは必ずしも可ならず、他に學ぶは未だ必ずしも益無くんばあらざるなり。徒に思ふは必ずしも功あるにあらず、學んで思ひ、思ひて學ばゝ未

だ必ずしも得ること無くんばあらざるなり。

會心

默頭自ら許す微笑を得よ。

自己批判

朝三暮四の輕浮淺薄な態度で世に處し人に對し書を繙くのでは駄目だ。書に接し說を聽くには必ず自己批判の一關門を經過せねば安んじ得ない一境地に達しなければならぬ。

自己確立

總てが自己確立で一貫するならば、自己の權利を明らかにすると同時に又自己

の義務を果すに忠實でなければならぬ。時には自己の慾望を犧牲にしてそれを拋擲する處に自己を見出す餘裕をも存すべきである、

道連れ

旅は道連れ世は情けと云ふ。されど道連れになるには對手の歩くだけ自分も歩かねばならぬ。世は情けと云つても他人に親切にさるれば自分も親切を盡さねばならぬ。厄介者の道連れと弱者の無心とは此の位困るものはあるまい。

自他両存

西洋人の生活は自己保存の生活、日本人の生活は他己保存の生活であつた。故に彼の生活は唯物的となり、我の生活は唯心的となり、彼は自己實現となり我

は自己犠牲と爲る。我等は此の二つの生活を超越し統一してこゝに『自他両存』の生活を營まねばならぬ。

遲着競爭

米國などでは自轉車の遲着競爭と云ふことが流行して居る、焦燥した近代人に對する皮肉な遊戯である。

泥棒商賣

商賣としても盜坊ほど算盤珠に合はぬ商賣は無いそうだ。これは前科七犯と云ふ男の僞らざる告白だ。

夫婦の交情

飯蛸もはた長蛸も見分けのつかぬは良き妻君にはあらじ。總じて夫婦の交情の冷と温とは、すゝむる汁の加減によりて生ずるものである。今の婦人達はたして這間の消息を解し給ふか。

女德擴張

日本の女に此頃女權擴張と云ふことが主張されるが、それは女德擴張の間違いだらう。女權を擴張して女權以て男子の領分を切取りするのではなく、女德を擴張し、女德以て男子を包擁するものでなければならぬ。

女學校出の細君

料理の參考書に誤植のある毎に一々腹の工合を惡くするやうな女學校出の細君

も困つたものです。

現代の女

男子の感情を弄ばんとする男子に對する一種の反抗、反省なき歐風の女尊病、勞働を卑むべき心、物質主義、之が現代日本婦人の思想である。

育兒

女の第一の使命は子供を擧げることである。擧げると云ふのは子供を生むで育てるだけのことではない。實に子供を生み、子供を育て、子供を高めるの意である。

恥

心に恥ぢよ人に恥ぢることはない。

女德

土が一切の汚物を受け容れなかつたら世界の汚物は何處へどうなるのだらう。土の德は不潔を排斥して自分の潔白を保つのではなく、不潔を包容し淨化して一大生命の產褥とするにある。之を坤德と云ふ。女德とはそれではあるまいか。

脫線

裃を脫げと云ふ教育を受けて褌まで外した者が多くて困る。

眞の自由

苦味い藥を飲むのを醫者の壓迫に從ふて自分の自由を失ふのだと感ずるのは、

まだ社會性の充分に發顯せぬ卽ち人格の現はれぬ小兒の事である。人格の旣に現はれた人であれば却つて苦味い藥の與へられぬことを自分の自由の妨害されたと感ずる筈だ。世間の人々が口にする自由は多く此の小兒の自由である。

男女服裝

身分相應の服裝と云ふことは女に要求することだ、男は職業相應の服裝がよろしい。

冷舌熱舌

冷やかで新らしい事を說く人は多い。熱した舌で舊い說を述べる人さへなくなつた。

現代紳士

苦悶の身に從容の紋付を知てゐるのが現代紳士と云ふのだ。

履物と泥棒

泥棒が一番に目星を付けるのは履物ださうな。履物の亂雜な家ならば泥棒は屹度成功するそうだ。

土俵に立つ

力士が追剝に會ふてブル〳〵慄えてゐたが衣物を剝がれて裸體にされたので初めて猛然として追剝と格闘したと云ふ話がある。味ふ可き話だ。

指環と金時計

貧にして貞操を賣る女、窮して節を賣る男は、決して最後まで其の指環と金時計を典ずるものではない。

自信の火

火と自信が强過ぎると釜の飯は焦げてしまう。

基本人格

事毎に自己の基本人格が侵されはせぬかと云ふことに氣を付けねばならぬ。

墮落のドン底

文藝や哲學を我儘や放蕩の辯護に用ゆるほどの墮落は他に滅多に無い。

女と狐

狐は皆自分の尻尾を自慢して振り返り振り返りして見るものだ。女には尻尾がないから、キモノを振り返り振り返りして見る。

一五一糸

國家の建築に一個の瓦を寄附し、人道の織文に一糸を獻ずるを得んかな。

人格の正札附

人格の所在が人から衣服へと移つた。三越や高島屋へ行くと、出來合の人格が正札でぶら下つて居る。

泥棒根性

利己主義と云ふのは露骨に言へばどうして法律の網を潜つて泥棒をしやうかと

云ふのに近い。

隱笠隱簑

隱笠と隱簑を着せたら現の世に泥棒と姦淫を恣にしない者が幾人あるだらう。

氣の毒な自慢

老人は得て禿を自慢にするものだ、こんな氣の毒な自慢はない。一體自慢をする人は大抵氣の毒な人だ。

甘言如密

眼を閉つて藥を呑むが盃を戴いて酒を呑む。忠言には耳を塞ぎ甘言には耳を傾ける。

遠慮

無作法と自由とが因襲の名を負はせて謙讓を驅逐した現の時代に、遠慮などするのは損だと云ふ人が多いが、遠慮しないのが目先勘定の一文惜みの百取らずだ。

捨石

男子の眞骨頭は捨石になるにある。眞の男子は堀の埋草となつて朽つるとも宮殿の甍に瓦たることを欲せぬものだ。

反響

一匹の蛋を火に投ぜよ、彼の死にも反響あり。

對話

簡單に語り、忠實に聽け。

孤獨

孤獨は絶對に神聖である。又絶對に醜惡である。人間は孤獨にして絶對に醜惡を行はざるに到達せねばならぬ。卽ち君子は其の獨りを愼む所以だ。

駄洒落

駄法螺はまだしも駄洒落を弄するのは趣味の最低級に屬するものだ。人間も駄洒落など云つて自ら慰め自ら娛まねばならぬに至つては寧ろ悲慘なことだ。

知らぬ顏

火鉢の中へ痰を吐いて火箸の先で灰と一所に丸めて置いても篩をかけて掃除する迄は知れぬ。知れたところで吐いた主は誰が誰やら分らぬなどゝ思つたことはないか。

精進顏

軍鷄を喰つても腹の中で時をつくらぬから心配はないと精進顏してお寺詣りをしたことはないか。

一枚の舌

哲學者ゼノ嘗て人の言葉を聞かずに喋舌る青年を戒て曰く「自然は人に一枚の舌と二個の耳とを與へた。我々は談すことの二倍だけ人から聽くべきものだ」

清廉

清廉を以て聞へた哲人クラチダスが或者に賄賂を強ゐられ、私があなたなら取つておきますと云ふに答へて「なるほど私があなたなら取りもしませう」

赤面

ダイオゼ子スは或青年が顔を赤くしたのを見て「よし〳〵德の色が頰に出たのだ」

舌

ストア學派の開祖ゼノ曰く「足よりも舌の滑るのが一しほ危險だ」

踊子

京の名物都踊の大師匠片山春子婆さんの話である。『踊子が舞臺で踊る時に、樂屋から踊つて出て引込む時にも樂屋まで踊り込む、その心懸けが踊子の生命です』と。

自ら罰せよ

人間は人手を藉らず自ら罰して行くやうな心掛に進まねばならぬ。新島襄先生は生徒の不行狀を罰するにすら自ら笞を以て自らの腕を擲られた。

貧乏の水

貧乏の水で洗つて見ると十人が九人まで友人のニコやかな顔の上の笑粉は剝げてしもふ。

清閑

苟も志無ければ已むが、志有るものは清閑ほど志を長養せしむるものはない。貧は人をして閑を得せしめ、閑は人をして長養の時を得せしめる。

貧の三德

貧に三德あり、貧は人を鍛ひ上げる。貧は腐肉に集ふ蒼蠅の如き惡友を一掃する。貧は粉塗彩飾の形式、習慣、虛禮、空文の生活を去つて、人間眞善の生活を悟らしむる。

貧

貧にして人に捨てられ人に顧みられざるに至れば、我人を累せず人我を累せず、悠然として聖胎長養の日月を得る。詩は窮後に於て其の巧を見る。

女の好尙

若し世の女達が、色の黑きを惡み、鼻の低きを惡み、貧しきを惡むが如く、世の男達の不義にして富めるを惡み、柔弱にして氣骨なきを惡み、輕佻便佞にして不眞面目なるを惡まば、世はおのづからにして面目を革めんものを。

功利主義

功利主義の敎育は鍋蓋をチョイ〳〵開けて見る料理人のやうな忌むべき心理を有する人を造る。

勞働心裡の錯誤

郵便局や鐵道院の小包や手荷物の取扱振を見るに、物品を右から左に移すのに必ず右から左に抛げ飛ばして居る。これを勞働心裡の錯誤と云ふ。

現代男

女が高い處から纖い手を出して何かを與へるやうな眞似をしてワンと云へと云ふ。すると下の方でワンと云ふ聲がする。又ワンと云へと云ふ、すると又ワンと云ふ。三遍くる〳〵と廻はつてワンと云へと云ふ。すると今度は三遍廻つて悲鳴を擧げるやうな聲でワンと云ふ。見ればそれは犬ではなくて「現代男」と云ふ青年であつた。これは漱石さんの惡口だ。

胃病患者

彼は胃弱の癖に大飯を食ふ。食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる、二三ページ讀むと眠くなる、そして涎を本の上に垂らす、これは漱石の猫が實見したことらしい。私も斯んな人を度々實見する。

鏡に對して

「自家研醜自家知」と云つたものだが却々自家の研醜が分らない。鏡を取つてその獅子ッ鼻を尺寸の前に照らし出しても、ニコ〳〵笑つて自家肯定をやる者が多い。況んや鏡にも映せぬ內的の「我」が分らう筈がない。修養の第一歩は「己れの醜を知る」にある。

行燈袴

セル、アンドン袴は多く鼠色である。そして木綿でもなければ絹でもない、高價でもなければ安價でもない。男でも着らるれば女でも着られる。不徹底な、微温的な、妥協的な、男女性不分明な中性的なところが、如何にも現代人の或物を象徴して居る。

氣の毒な青年

移り氣の、涙もろい、氣の弱い、意地の無い、女好きの、怠け者で、蔭辯慶で、對談中體が定まらず、頭を低れて、俯し眼でちよい〳〵偷み視をして聲の低い、語尾の消えた青年ほど氣の毒なものはない。

模倣服從

或個人が或發明によつて社會の師たらんには豫め社會を師として發明の材料を收得しなければならぬ。獨創の初階段として模倣、支配の前提としての服從は修養の常道である。之を忘却無視してはならぬ。

相對的

富を得ると云ふことは相對的でない場合が多い。自らの獲得は他からの奪取を意味する。學や德は自ら得ると共に人に與へることが出來る。

與へよ

親は子に與へよ、借す勿れ。

慈善

貧しい時賣りたる良心を富豪になつてから莫大な金で買ひ戻す人がある。自ら慈善と云つて居る。

惡魔

他人の不幸の上に自分の幸福をつぎ木する人が多い。

情と理

情の手綱を以てすべし、理の鞭を以てすべからず、これ妻の悍を御するの道なり。

悲觀

悲觀は清高尊貴なる一感情である。凡て劣惡卑醜なる階級者に悲觀は少ない。

悲觀は失望や落膽や喪心の如き愚劣なものではない。又樂觀のやうな利己的のものではない。悲觀は同情の泉である、犧牲の源である。現の世樂觀の俗物多く、悲觀の仁人義士何ぞ少なき。

勇性

勇は自ら死せず、性は自ら生きず。

生命

生命とは刹那の事實なり。

餓死か滿腹か

耻ぢざる餓死あり、誇るべき滿腹あるなし。

彼一語我一句

社交に於て注意すべきは談話を獨占せずして自ら語ると共に他人の語る處をよく聽くことだ。「彼れ一語、我れ一句」

十二分の愚

酒となり、肴となり、妓となり、三味線となり、亂舞となり、杯盤狼籍となり、而して十二分の歡を盡したと云つて散會する日本の宴會ほど十二分の愚を盡すものはない。

理想の良人

酒も飲まぬ、女にも近かぬ、そして野暮であつてはなりませぬ。

自知の明

美人は多く美粧するが故にます〳〵美なり、醜婦は多く粧はざるが故にますます醜なり。彼等は共に自らを知る如くにして實は自らを知らざるなり。

道

易に曰く、道は滿盈を忌む。

順良

河を渡るには流れつゝ渡ると云ふことが必要である。

健康の妙諦

米國々務卿ランシング曰く『私の健康を一言にして盡せば新鮮なる空氣を多量

に、食物を少量に』と云ふのだ。蓋し健康の妙諦。

言行一元

他動的の生活に於ては生活の原則は我々の生れぬ前から定まつて居る。我々は其の道德の型に嵌まればよいのだ。故に言ふところは聖經賢傳を復習するのである。だから言ふは易く行ふは難しであるが、自發の生活に於ては自ら言はねばならぬ、言ふと行ふとの間に決して區別はない、言行一元にして二致なしだ。

卒業

杉浦重剛先生曰く『自分は一體卒業と云ふ二字がでく嫌ひである。卒業などゝいふことが此の人間の一生の中にあるべきものでない』

要求

現代では何人も口癖のやうに『要求々々』といふが王羲之は別に其反面を說破して居る『爭レ先非二吾事一、靜照在レ忘レ求』と。

憐むべきは

個人として最も憐むべきは高尙なる道德的情操を有しつゝ決行の意力を缺く人である。國家として最も憐むべきは、自由と解放を信條としつゝ而も之を事實化する實力を缺く國家である。

距離

目が外物を見るには相當の距離を要する、其理由は外物の影象が眼球に映じそ

れが曲折回轉して網膜の中心に寫るだけの距離を中間にも要するからであるが、自己の目には其距離がないから目で目を見ることは出來ない、此の視學の原則を心理に應用して我々が自己の短所缺點を見出し得ないのは、自己には自己を觀察するだけの距離が無いからである。距離を得よ、距離を工夫せよ。

友人

眼が自分の眼を見るには曇りなき鏡を要する。心が自分の心を知るには忠實なる友を要する。

無價値

凡て無價値なる者は、自己の價値を如何にしても向上せしめ能はざるほどに無

價値なる者は他人の價値を傷害して他人の低下せられたる價値と對比的に自己の價値の向上を錯覺するの外はない。又劣等生は優等生の失敗を見て手を拍ち、貧民は富者の倒産を見て自己の貧を忘れ、惡人は善人の秘密を探り得て喝采し、醜婦は美人の薄命を見てホクソ笑む、皆自己の悲哀の輕減を計る爲めに羨望の對象たる人を傷害せんとするのである。

悟

悟るは「さ取る」であると誰かゞ言つた。

この心

戀する人の爲めに盡さんとする心はわれながらホト〳〵感じ入るほどに行き屆

いて居る。この心を以て世のすべての人に盡さんは如何に。

知らぬ振り

女の男に惚れたるはしほらし、男の女に惚れたるは憐れなり。男は女の惚るゝに任せて知らぬ振りするを高しとす。

珍らしからぬ女

世の男に告ぐ。世界を通じて男の數女の數と相如く。所によりては女の數遙に男に過ぐ。女ほど有りふれたるものなし、女など珍らしがるによつてもろ〳〵の問題は起る。馬鹿々々しき沙汰なり。

犬と主人

人に吠付く犬など飼へる主人の氣質、刺を通ずるまでもなし。

自治皆零

共同便所には踏石の上に立つて放尿すべし、電車にはふとも〻を出すべからず、公園には樹木を折るべからずと云ふ制札がある。行政萬能、自治皆零の國。

過量の害

量を過せば酒の害恐るべしとなすものあり、過量の害酒のみならんや、飯も茶も牛乳も睡眠も性慾も何も彼も。

勞働の價値

多くの人が最も誤解して居ることは勞働の價値である。彼等の勞働をするのは

勞働に絶對價値ありとするのではなくして、勞働から遁れんが爲めに一時餘儀なく勞働をするのである。

徹底

大晦日の隣りに元日が來る。物事は窮すれば通ずる、究むれば達する、上りつむれば下り坂となる、迷ひの闇を探り探りつむれば悟りの眼がポカリと明く、誤解を徹底せしめた其の刹那に眞理を發見することが出來る。唯徹底的に……唯徹底的に。

信心

或老僧の曰く、藝人、藝妓、浮氣者、泥水商賣のものなどには寺まゐり神詣でなどつとめてするもの多し。寺まゐり神詣でなどする人を見て直に殊勝なりと思ふは誤りなりと。

二つの我

朝五時に起きねばならぬと思つて寢ると屹度五時には我を喚醒す我がある、すると又睡むたし睡むたし再び眠らんかなと云ふ我がある。人は何人も此の二つの我に支配される、その何れの我に從ふかによつて人の運命は右し左するのである。

質

文は文目を奪ふ、巧は人目を掠める、質は人目を明かにす。

不道德の累積

凡ての病氣は父祖の不道德と自己の不道德との累積に外ならぬ。

雨讀晴耕

勞働と學問の一致、古人の所謂雨讀晴耕はそれ吾人の理想か。

忙人

新春某に送る

『手首まで時計をはめてそは〳〵とさていそがしき君が春かな』

貧に安んず

身貧居に處すれども心安居を得れば春長閑なり。

『貧居士のさはさりながら安居士のわれはのどかに春をむかへつ』

人格

眞の自我を有せざる者は自己を以て常に或物の附屬物と心得て居る。斯る人に取つて人格は目的價値に非ずして、方便的價値、絶對的價値に非ずして相對的價値である。

自己創造

教育とは何であるか、最初は模倣することである、中程に至りて學修することである、最後に至つて自己創造を行はなかつたならば何の役にも立たぬ。最初と中程とを遺憾なく修めた卒業證書の所有者が、動もすれば最後のみあつて最

初と中程とを有せない無學者に先を越されるのは自己創造が教育の眞髓である
ことを語るものである。

罪

罪の最大なるものは人の精神を殺すことだ。

遠く高く

眼は遠きを見よ、千里を思ふものは百里に疲れず、歌は高きに獻げよ、上方に
聞ゆる時且つ八方に傳はらん。

男

眞珠は貝の、花は女の、血は男の……

京染

京染の老いたる紺掻曰く、たゞ淺く染めて度數を重ぬれば佳き色が出ますと。

失心

得て情怡ばざるも、失ふて心を傷らざるは難し。

幼稚なる言語

實在の眞風光、第一義生活の眞味は到底言語を以て說くことの出來るものでは
ない。元來言語は自家獨特の思想感情を表現する爲めの記號ではない。そは寧
ろ自他の間に思想と感情とを交換すべき信號である。而して信號は經驗の共通
的要素を豫想する。從つて言語の表現し得るは人格中の非人格的要素、換言す

れば人格中の社會的實際的方面である。吾人の意識中客觀的と認めらるゝ知的要素を表現する言語の發達に比して純粹主觀を表現すべき言語が極めて幼稚なる發達の階段にあるは正に之を立證して居る。故に强いて言語の社會性に背いて之を籍り獨自の神秘なる內的經驗を表現せんとせば言語は直に其の信號たる所以の性質を失ひ記號となり、象徵となり、迷語となる。

沈　默

雄辯豐辭を以て稱せらるゝ孟子すらも浩然の氣に就いては『曰く言ひ難し』としてゐる。饒舌と概念の陳列とを以て上乘の哲學と心得て居る歐米人にありても『雄辯は銀、沈默は金』と云つて居る、エマーソン等の神秘論者に於ても『賢

き沈默』なる語を用ゐて居る。釋尊は四十餘年間橫說縱說しながら而も『一字不說』と一切を否定し、又儒禪二敎の合一を高唱した明治の大德洪川和尙に至つては其名著『禪海一瀾』を結ぶに『何が故に人無きに獨語す、其の鄙しきこと鼠の如し』との語を以てした。孔子も『予れ言ふ無からんことを欲す』と言語の不充分を嘆じ又『二三子我を以て隱せりと爲す、吾れ爾に隱すことなし』と述べて反覆丁寧の說明も到底縹渺たる境地を髣髴せしむるに足らざるの所以を告白して居る。要するに一切の定義は限定であり否定である、從つて最も自由にして充實せる第一義生活に徹せる者は必ず言語を賤しむ。强いて問ふ者に維摩の一默は最も賢なるものである。

饒舌

古來の先哲は皆饒舌を戒しめた。貝原益軒は其著養生訓に『言語を愼しみて無用の言を省き、言を少なくす可し、多く言語すれば必ず氣へり又氣のぼる、甚だ元氣をそこなふ。言語を愼しむも亦德をやしない、身をやしなふの道なり』と云つて居る。平田篤胤は其著志都の石屋にも太乙眞の言を引いて神氣を養ふの秘訣として寡慾を說き、其の第一として『言語を少うして內氣を養ひ』と云つて居る。白隱の夜船閑話に曰く『只要す尋常言語を省略して儞の元氣を長養せんことを、此の故に云ふ目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默す』と。

刹那の充實

吾々は過去や將來に安立の地盤や隱栖を見出すことは容易に出來る。然しそれは無意義であり又憶病な不眞面目な態度である。踵を接して衝き當つて來る此刹那々々の矛盾不安不滿不快暗黑懷疑動搖を刹那々々に踏破し慴伏し超越し解決して刹那々々により大なる價値生活を增殖し、より高き自我を造り行くのが眞に學ぶべき人生勇者の態度である。

社會的活動

眞理、道義之を自覺する者は之を世に問はねばならぬ。自覺を提げて直に社會の醇化淨化の事業、更に國家的政治的の努力を試みるのは個人が社會に存在す

る當然の責任である。徒に壺中の天地に逍遙し方寸の自己をのみ湎想して眞理の王國道義の王城を我が胸の裡にのみ築いて自ら高しとする如きは非なり。

臨機應變

禪は劍は機を尊ぶ。臨機應變は劍の活用にして頓機卽妙は禪の大用である。物質に對しては概念的思索は有効だが、朝に夕を測るべからざる人生の機微に對しては其は無効である。

感情を私するな

智識は共有的のものであるが感情は私有的のものだと思つて居るのは間違ひだ。自己の感情に執着して、此の執着の忘執を破らんとする時は之を「自己の

感情を欺くもの」として肯んぜる如き者がある。此は畢竟人間の感情を自己の私有物の如く考ふるより生じて居る淺薄な思想の結果である。眞の智識、高級の智識の前に誤りたる智識、若くは低級の智識が點頭し屈服する如く、公正圓滿なる高級の感情の前には、誤りたる感情　低級的感情をいさぎよく拋たねばならぬ。

小善

福澤諭吉先生は『智慧の小出し』と云ふことを言はれたが、吾々は何時も『善行の小出し』をチョイ〳〵やる心掛けが肝心である。

一日一善

小善と雖も之を行ふことは實に一個の發明發見である。一日一善などゝ云ふが一日に一善を發明發見することはなか〳〵容易なことではない。ボンヤリしてゐると一日一善は愚か、一年十年惡くすると一生の間碌々人間らしい善行なぞせぬ者が多い。

人生

人生は坂路だ、上らなければ必ず下る。人生は自轉車だ、立ち止まれば直ぐ倒れる。

卽離

離れて物を見ると云ふことが、自己の思想の基礎を確立する爲めにも、欲望の

紛亂を調節する爲めにも、實際生活の方針を決める爲めにも、最も必要のことである。物に卽き過ぎては公正を失ふ。

自繩自縛

吾人の自由と云ふのは束縛を受けぬことである。束縛と云ふことは自繩自縛しなければ滅多に他人が他繩他縛するものではない。

見かけ通り

人は見かけによらぬもの』とは異常の人に對する變例であつて、普通は見かけ通りのものである。

學問は喰物

私は學問を喰ひ物にする。學問を賣物にしたくはない。

傍樂

天理教ではハタラクとは傍樂で、傍の人に樂をさせる爲めに犧牲的に努力することだと說く。教祖の駄洒落に一語千金の價がある。

節から芽

天理教々祖の「お筆先」か何かに「節から芽が出る」と云ふ句がある。節は難關である、事業の芽も人格の芽も此の難關から出る。節が大事だ。

不道德滿員

電車の車室に唾を吐く男がある。『それはいけませんね』と面責すると『誰だつて吐くぢやないか』と云ふ。それもそうだと思つた、全く誰でも吐くやうだ。不道德が滿員の世の中だから。

泥棒の國

巡査が泥棒を踏ん縛つて意見してやると『大臣だつて知事だつて大泥棒するぢやねえか、へン意見が聞いて呆れらァ』と多寡を括る奴があると云ふ。それもそうだと思つた。全く大臣だつて知事だつて泥棒みたいなことを働く奴が多い。一體どうすればよいと云ふのだ。

天才の愚

天才が其愚其痴を表白すると總ての人は戰慄する。總ての人は彼によつて其愚

其痴が自分にもあることを悟らせられるからである。

樹皮の破壞

樹木はあの硬い樹皮によつて保護されてゐながら、しかもその樹皮を破壞しつゝ生長を續けて行く。樹皮の破壞のある處に年輪の增加があり、年輪の增加のあるところに樹木の生長があるのである。人間でも向上し進步し革新するものには常に此の樹皮の破壞がある。社會は之を寬假せねばならぬ。

道德

各個人にして若し十分なる聰明と其を實現する力量だにあらば、其の生活の關はる範圍に於てはてんでに立法者であり道德の創設者であり得るのであるが、

それが出來ないことは尙各個人がおのれの靴を造ることが出來ないと同樣である。さればあつての不便は全くないのゝ不便より便利であるとして靴工の造つた靴を用ゐて居ると等しく或立法者の作つた法律、或道德の敎師の作つた道德を用ゐてゐるのだ。

葬式の衣物

親が危篤だと聞いて、貴女は葬式にはどの衣物を着たものだらうかと氣遣ふ人である。

怒るな諦め

川の上流から主の無い筏が流れて來てそれに衝き當つて水に溺れた人は、あの

やうな筏が流れて來るのに避けることを知らなんだのは自分の落度であつたと思ふであらう。併し若しも其の筏に人が乘つてゐたら自分の落度を忘れて憤然として怒るであらう。でも事實は同じであつたのだ。人を忘れ、筏を忘れる修養が必要だ。

愛

目下の者を可愛がるのは美德だが、それより目上の者を大事にするのが更に美德である。子を可愛がるのは犬でも猫でも出來る、親を可愛がるのは人間でなければ出來ないことだ。

愛の使分け

若いものには苦勞させて可愛がる。老いたものには樂をさせて可愛がる。

智情意

智の盤石は餘りに冷たい。情の川に棹させば流れる。意地の山路は餘りに窮窟だ。

境遇の支配

監獄に居る囚人は寄宿舍に居る學生よりも惡い事をしない。囚人も感心すべきではないが學生も不都合だ。彼等は常に境遇の支配を受けて居る。

夢

我が胸裡の秘密を知りて無意の中に吾を評し、不文の判に吾が心を擬するもの

これ夢である。夢の我に於ける確に相關するにあらずと雖も吾が夢の吾が身心に關せずと云ふことなし。夢はたしかに其人によりて品を異にす、夢の品に徴して以て德の階を知ることが出來る。曉にして昨夜の夢をたゞすことは、自ら知り自ら戒むるの好修養法である。

生を衛るの道

昔日延の日遠上人、衆徒の浴室に入るに衣を脱して背に灸の痕無きものを視て嘆じて曰く『此の子、學に志無きか』と灸治はせずともあれ、生を衛る道を知らずして學に志すも業を學ぶもあつたものではない。

賣節

士人の節を賣るや惴々焉たり、婦女の操を賣るや戚々如たり、商の物を賣るや堂々乎たり。

錬鐵

鐵に鍛錬を加へて錬鐵とし其の最も精錬されたるものは純金の五十倍の價格を有すると聞いた。

不平と屈從

斷然辭職すると云ふ。先輩は『何處へ行つても同じことだから辛抱し玉へ』と云ふ。不平と屈從とが役所にも會社にも工場にも充塞して居る。使ふ人も使はれる人も仕事を買賣してるからさ。

雪隱の掃除

一日に一回づゝ雪隱の掃除をするのは何よりの修養である。殊に一家の主婦に於て然り。

使用人の心得

人に使はれる者の心得は使ふ人の要求を先に考へ自分の要求を後に考へることである。それが順序であるからである。

嘘と言語

「眞に感謝する」「實に難有い」と云ふのは單に感謝する、難有いでは嘘らしく思はれるから「眞に」「實に」と云ふ言葉を添えるのである。人間社會に嘘が流

行するほど斯うした言葉の必要がある。平素て嘘を言ふ人ほど斯うした言葉を餘計に用ゆる譯だ。實に氣を付けねばならぬことだ。

嘘の罪惡

嘘が何んで惡いかと云ふことは嘘は人間の言語の成立を破壞するからである。白い者に對して嘘を吐く人は黑と云い青と云ふ、だから白と云ふ言葉は少からず其の成立を妨げられる、白か黑か青か分らぬことになる。人間社會は言語で成立して居るのだから其の言語の成立を破壞せんとするものに對しては社會は悛嚴な制裁を加ふべきである。

嘘の難易

實を云ふと嘘は眞實よりも六かしい。眞實は卽座に言へるが嘘には工夫と心配が入る。容易で安全で且つ利益のある眞實を使用せずして、工夫を要し心配を要し結局不利益な嘘を使用する人が多い。それに嘘は實を手繰り寄せるからすぐ曝れる。

嘘の中毒

嘘と河豚汁は其場限りで祟りがなければ是程旨いものはない。然し中毒つたが最後血を吐かねばならぬ。中毒らぬにしてもビク〳〵もので居らねばならぬ。

嘘の責任

嘘も吐いたからには義務がある、責任がある。それをどうするかを思はぬ人が

嘘をつく。

表裏

人間は誰でも裏表がある。只裏を裏とし、表を表として使用すれば誰も怪まなければ咎めもしない。紙幣は武内宿禰の顏の附いてゐる表を出しても横文字の裏を出しても世間に通用する。市に定價ありと云ふ譯だ。人間だッてその通りだ。

潛伏期

病菌には潛伏期がある。因果の理を悟り得ない者は、病菌の潛伏期間にある現在の健康狀態だけを見て樂觀してるのだ。

貪　慾

剰すのは惜しいからと云つて喰べてしまふ。だから食傷をするのだ。卑吝な人は、自分の腹と懐を以て塵捨場にしたり倉庫にしたりする。

酒と煙草の力

アルコールの力を籍らねば自分の思つたことを人前で言ひ得ない卑怯な人がある。煙草の煙に話を紛らさうとする老獪な人がある。

人の心

金や威力や理窟で人間の心が買へるものではない。高利貸でも巡査でも代言人でも一番に人に好かれる譯のものではない。

醉生夢死

人は自分の脈博と社會の皷動とが共鳴する生活でなければ、所謂醉生夢死の生活である。

日省訓

吾れ日に三省すべし、吾れ自ら欺いて不正直ならざりしか、吾れ他に對して不親切ならざりしか、吾れ業に從ひ不勉強ならざりしか。これ無上々の日省訓。

與ふ

道德の發端は「交換」である、其の過程は「與へて取る」である、而して其の終極は單に「與ふ」でなければならぬ。

天佑

我れ恐懼し、我れ修省し、我れ努力し、我れ向上せんとす。一擧手一投足の間必ずや天佑の漲り溢るゝものあらん。

迷悟

我より行きて物を見るを迷と言ひ、物我に來りて見ゆるを悟りと云ふ。

無用の語

『ひまな人』と云ふを英語にて簡潔に譯し難し。朝鮮に『働く』と云ふ語なし。

持主

『過食すれば人は食物の持主に非ず、過飲すれば人は酒の持主に非ず』と、この

語の持主はエマーソンである。

蓮月尼の歌

失戀の多恨に身を破る勿れ、金貸さぬ友の無情に世を果敢なむこと勿れ。蓮月尼の歌に曰く『宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下臥』

主人の心

家の周圍に高き塀を繞らし、其上に釘を植え或は玻璃硝子の破片を立てたる主人の心「財を守るに險惡なる手段を用ゆる者焉んぞ財を得るに惡辣ならざらんや」

風懷

長州の村田清風は面白き人物なり、其の藏書の印に「集散自然に任じ長く四海の寶と爲す」と刻して置いた。風懷掬す可し。

風流

花より團子と云へど團子あれば以て心を花に專らにし難し。人生の娯樂を物質の累積にありと思ふ者、風流を解する能はず。

眞贋

或友人の妻君がダイヤ入りの指環を指して居る。どうかあれが贋物であつて呉れ、ダイヤが若しも眞物だと女が贋物だから。

巡査

巡査を見ると反感を抱く人と、御苦勞だと思ふ人とある。

酒

「下戸の建てたる藏はない」と云ふ唄がある。唄はないが「上戸の潰した藏はある」。

情味

漬物は壓石が利かぬと味が出ない。苦勞を知らない人には情味がない。

自藏

白いものに墨のついたのは汚れである。黑いものに胡粉の付きたるは汚れである。汚れにはもと定りたる性無し、地の色にたがふを汚といふ。故に指物師は

器成る時先づ必ず汚す。或は桑色に或は榜葛刺花に――是れ皆汚れんことを厭いて先つ自ら汚すのである。貞女は自ら粗服してその貞操の汚されざらんことを期し、智者は愚を粧ひ、識者は寡默を守りて其智其識を汚さゞらんことを期す。

照準

銃を取つて射的の照準をするには隻眼をふさぐ。隻眼の照準は雙眼の照準よりも的確なり。人生の行路たゞ横目をふらずば修行疾くならん。

必要的消費

身分相應の生活よりは人間必要の生活を理想とすべし。吾人は人間として理想

的生活即ち其肉體的生活、其精神的生活、其道德的生活の向上發展を計るが爲めの消費は、各個人の所得如何に係らず凡て之れ必要的消費にして、之れ以外のものは所謂奢侈的消費である。百萬圓の長者も一日壹貳圓の所得勞働者もその生活に於ては人間の理想的生活即ち必要的消費を要するものにして斷じて奢侈的消費を要するものではない。

人間らしき旅

無自覺の幸福から自覺した不幸へと追ひやられて行く人類の永い旅行に於て――その自覺の旅路は其の旅路に上つた吾等には決して容易な旅ではない、寧ろ一種の難行苦行であるが、その旅路を行く外に人間としての行くべき道がない

ことを想へば、その苦みが強ければ強いだけ、その悶えが大きければ大きいだけそれだけ人間らしい旅をしてゐるといふことである。

安心

安心は前進する活動的精神の狀態である。沈靜澁滯した心の狀態ではない。機織姫の手を見よ。梭を左右より轉じて嘗て暫くも其手を休めない。其機の絲の終るまで彼女の心は絲に繫がれて動く、されど彼女の安心は梭と共に刻一刻左右より織り込まれつゝあるではないか。梭の絲が切れた時彼女の手は休む。其時こそ彼女の眼に不安の色が宿る。

蚤の分別

脱ぎ棄てた寢間着の縫目などに頭隱して尻隱さぬ蚤の分別も、何やら悧巧だと云はれる人達の仕業に似寄つた點がある。

靜思無爲

世間の智者は皆一樣に能率增進を叫ぶ。靜思無爲それは愚者のことだらうか。

虛榮

◎◎みえの行きどまりは小供が讃められて大人を背負するやうなものだ。見て貰いたさに苦しい々々々。

監獄

監獄から出て來て、いゝ修養になりませしたなどゝ挨拶に來る紳士が多くなつた。

貞操

貞操は趣味であり、嗜好であり、誇りである。この要求を感じない人に於ては貞操は何んでもない。

辛抱

物理の加速度と云ふことを知らない人が辛抱と云ふことを知らない人だ。

悲劇

悲劇は優柔不斷の弱者に附き物である。

自己心内の傳統

一般民衆の心裡に伏在する傳統と、周圍の習慣や制度に體現せられたる傳統の

打破すべきを知つて、自己の心内の傳統を打破することを知らないものが多い。

自省

今日幸に事無くして夜半ひとりおのれを省る。室内安らに靜にして戸外おだやかに更け、時計の音さやかに存じて人の聲既に絶えたり。一心と孤燈と與に明亮。雜念と雜緣と共に銷熄す。机前の端座、茶後の工夫、只一念頭を回らして自己を省みるとき、而して幾度か思い幾度か省み幾度か批判して行つた結句、ハタと行き當る驚く可き何物かを見出すであらう。曰く「虚僞の生活」……

生活の豐富

生活を豐富にすると云ふことは恐ろしい誤解を生じ得る傾がある。今の世生活

を豊富にせんとして好んで簡易ならざるを致し、而して險阻にあひ煩亂苦惱するものが多い。生活の豊富はむしろ簡易の中に存じて紛然雜然たるもの丶中に存ずるのではない。

矛盾

眠らうとしてあせると尙眠られない、眠られないのも道理である。眠らうとあせるのは活動であつて努力であつて主張であつて、眠ると云ふのは休止であつて無爲であつて無自覺である。この互ひに相容れざるものを容れしめやうとして無益に時を過すのだ。世の中にはこんな馬鹿げた苦勞をする人が餘りに多い。

觀察

ダイヤモンドだつて或る定まつた角度から見た時にのみ燦爛たる光が見える。どう向けても一樣に光るものではない。人を買ひ被つたり見損なつたりするのは此の光と角度の關係を知らぬからだ。

公益私益

『先づ私益を收めて後に公益を圖らう』など丶云ふ人がある。我々は正直に勉强さへすれば炭屋が炭を賣り、豆腐屋が豆腐を製するのが直に私益になり公益になるのである。公益に一致しない私益と云ふのは必ず不正事業の利得である。まづ私益を收め大富豪になつて寄附金をして慈善家にならうなど丶思ふのは、軍需品の罐詰に石ころを入れて大に儲かりそして後日國家に大寄附金をして男

爵にならうと云ふやうなものである。

心と氣と血

心は氣を率ゐ、氣は血を率ゐ、血は身を率ゐるものである。

全氣全念

黒闇で脱いだ下駄を黒闇で穿けないのは下駄を脱ぐことに徹底しないからだ。下駄を脱ぐことに全氣全念を用ゐないからだ。四十になつても五十になつても下駄一つ満足に脱ぎ揃えることの出來ない人は澤山ある。嘗て下駄を脱ぎ揃へることに全氣全念を用ゐたことなき人である。

靜光動光

室内の五燭光では六號活字が讀める。されど室外の風の裏にある百燭光では新聞が讀めない。靜かな光と動搖する光、靜かな心と散亂する心とは其の力其の働きに大變な差異がある。

散亂の氣

電報を握りながら碁を圍んだり、新聞を讀みながら飯を食つたり、字を書きながら客と應對したりするやうな事は、聰明な人のやゝもすれば爲ることである。が、かゝる習慣は散亂の氣を養ふて瞳其舍を守らず、耳その圓を保たざるに至る。戒むべきことである。

孫子の兵法

孫子の兵法に「善く戰ふ者は勝ち易きに勝つ、故に善く戰ふ者の勝つや智名なく勇功なし」とこれ亦處世の秘訣ではあるまいか。

助長

人は「やはらかみ」と「あたゝかみ」とを有ちたきものである。假にも助長の作用を爲して尅殺の作用を爲したく無きものである。

水と油

君子は水の如し、小人は油の如し。水沸熱すれば油を容るゝも油沸熱すれば水を容れず、君子志を得れば小人を包容すれども小人志を得れば君子を反撥して容れず。尅殺して已まず、排擠して陷る。

孝

刑は刑なきを期すと云ふが如く、孝も亦孝の名なきに至るを其極致と爲さゞるべからず。家に孝子を出すは啻に其家の不幸なるのみならず亦其の子の不仕合なり。故に望ましきは「涙の孝」にあらずして「力の孝」遍ねく行はるれば世復た表彰すべき孝子なからん。

力の孝

消極的なる傳説的忠孝主義は左團扇主義なり、樂隱居主義なり、到底舊思想なり。我等は父母に向つては苟も心身の健なる限り、必ず常に勞作せられよ是れ天壽を全ふし玉ふ所以なり、妻に向つては苦を以て苦と爲す勿れ、樂を以て樂と

爲す勿れ、苦を避けて樂に就くは早く凋衰する所以なり。而して其子女に向つては、汝若し親を思ふ心にまさる親心に感孚すれば宜しく努力して自己を實現すべしと說くもの是れ新孝道の本義なり。父母にして勤儉、精勵、克己敢て自ら懈怠するなくんば、子孫も亦勤儉、精勵、克己敢て懈怠せざらんとす。此の如くんば家々必ず餘福あり餘慶あり、何ぞ「涙の孝子」を要せんや。

心眼

眼をとぢよ、それでなければほんとうに見えない。慾をすてよ、そうでなければほんとうに儲からない。

勿怒

善人に向つて怒る事は慎まねばならぬ。それよりも惡人に向つて怒る事を一層慎まねばならぬ。

不憂無知己

我漸くにして人に勝れば我漸くにして人に異るのである。我漸くにして人に異れば人漸くにして我を知る能はざるに至る。我終に人に超ゆれば人遂に我を知る能はず、我の人に知られざるに至れば、また自ら慶すべし。抑何の慍ることあらんや。

高士の道

語に曰く『女は己を愛する者の爲めに容くり士は己を知る者の爲めに死す』と、

其の知らるるや死して悔い無からんとす、また陋なるかなである。これ畢竟婢妾臣僕の道であつて自ら重んずるの道ではない。高士は却つてみづから韜晦し實に人の我を知らんことを懼る。

德香道光

爲學の功の内に熟するに於ては起居進退、一擧手一投足の間に其德香道光おのづからに溢れ出づるものである。喫茶喫飯、談笑遊歩の間にも人格の光はありと流れ出づるものである。

韜藏

小廉曲謹、それは將來の大日本を背負つて立つ青年の學ぶべき態度ではあるまい、然しながら青年として深く心に銘すべきは所謂徑路狹き處一歩を止めて人の行くに讓る工夫がなければならぬ。磊落不羈の氣を使ふも自ら際限のあるもので常に玉を韜み珠を藏むるの用意がなければ、生命元氣は青年の間に發散してしまふ。

新超人

新日本の青年よ、汝等は新なる高人となり、新なる超人となり、新なる人間の貴族となれ。徒に群集に雷同して「街上の人」と爲る勿れ、「街上政治」の彌次馬たる勿れ。

三世一貫

祖先自己子孫――前世當世更に後生を通觀して初めて自己の充實は全きものである。

錢湯

日々の修養は錢湯に浴するが如し、他人の垢で我が垢を洗い淨めるのだ。但し上り湯が必要だ。

破目

綴布をして破目を隱さうとすると綴布をしなかつた時よりも破目が著しく目立つ。

個人の權利

個人の權利は他に對しては無限ではないが自己に對して絶大である。

心身共美

どうせ、おしやれをするなら外からも内からも願ひます。

眞我的運動

日本は先に攘夷運動と云ふ盲我的運動をやつた。後に歐化運動と云ふ僞我的運動をやつた。今後は日本國民が强烈なる進歩的日本主義を樹立して眞我的大運動を試むべきである。

資本家と勞働者

西洋では資本家は資本家として自覺し、勞働者は勞働者とし自覺す。日本に於

ては資本家も勞働者も皆人間として自覺せねばならぬ。

經濟的と道德的

經濟的觀念で物を粗末にさせないと共に、道德的觀念で物を大切にさせる教育が必要である。

服從と謙讓

「自由」と「平等」とが新道德のマントを着て大道を濶步する今の時代に、吾等は「服從」と「謙讓」の紋付袴を着けて路傍を步いてゐるのを決して肩身狹く思ふ者ではない。

天秤

天秤の一端に誘惑あり誘惑も動機なり、他端に之より重き動機を加へざれば到底誘惑に克つ能はず。天秤の一端に酒あり、美人あり、此重量約一百瓦あり、故に他端に於て、衞生、名譽、子女、家庭、朋友など云ふ重量約百五十瓦ほどのものを加へざれば以て意志を善道に傾かしむることは出來ない。人の意志は天秤である。常に重い方に傾く。

誘惑

一旦の誘惑に降るは深く恐るゝに足らざるも之が爲めに性格を損ずるのが懼るべしである。始め躊躇して呑んだ酒が後には呑まねばならぬやうになる。前の躊躇が後には後押するやうになる。

簡易

簡易の意義は廣大無邊である。不朽の教法、善美の政治、精到の藝術、充實せる生活は卽ち簡易である。簡易と云ふことが卽ち大道德である、大妙諦である。

成功主義

成功主義と云へば誰でも米國を以て本家本元と考へるが、此頃米國の社會道德觀は成功でなくて有用であると云ふ。如何にして成功するかではなくて如何にして有用なるかである。行爲として機械として設備として如何に多功なるかである。我國で唱導する成功主義の如きは露骨な成金主義である。青年を亡し國を亡すものだ。

醜を知れ

馬が糞すれば地を嗅ぐ、之れその臭を氣遣うなり。犬が尿すれば後足で砂を搔く、之れその醜を蔽はんとするなり。人は衆人公座の裡放屁して默するものあり、公道に尿して耻ぢざるものあり、電車汽車の中に唾して省みざるものあり。

五年の實行

一日の實行敢て難からず、一ヶ月の實行困難である、一年の實行に至つて至難である。三年の實行は茲に趣味を解するに至る。五年の實行は全く習慣の人となつてしもう。

習慣

朝起きて顔を洗ふと云ふことも習慣となるまでに實行の經驗がなかつたならば冷水摩擦位の面倒を感ずるものだらう。

庭園の解放

お宅の高塀を見る毎に監獄か火藥庫のやうな氣持がします。塀は邸の境を分つだけに役立てばよいのです。自由に内外の見通せる鐵柵に御改造なさい。第一立派な庭園を、近所の人達や、通行人の眼にだけなりと開放なさるのは、貴方の家の功德ですよ。

好都合な程度

地球冷却して殼を生じ人類の棲息に好都合なる程度に至れば人類自ら之に生ず

る。肉腐りて蠕蛆の發生に好都合なる程度に至れば蠕蛆自ら之に生ず。體質が衰弱して病魔の乘ずるに好都合なる程度に至れば病自ら發す。惡友に誘惑されたとか、貞操を蹂躙されたとか云ふものも其の多くは誘惑され蹂躙さるゝに好都合な程度に墮落してゐたのである。

疥癬の搔痒

疥癬の痒いのをかくのは一種の樂みである。第一義を知らざるものゝ享樂とはそれだ。

犧牲

人を犧牲にしたがる者の前には、人の犧牲になりたがらぬ者が殖る。

犠牲

國家や宗教を冠に着(き)て、犠牲を要求すること多ければ、個人主義の蝟螺(さざえ)の殼(から)にもぐり込むものが多くなる。

犠牲

犠牲には「正しさ」が加はらねば神に献ずる犠牲(いけにえ)にはならぬ。情死の如きは魔神に献ずる犠牲である。

擧國解兵

徴兵は國民の義務であると口にするものが其倅(せがれ)ばかりは入營しないやうにいろ〳〵の方法手段を講じてゐる。「自分の倅(せがれ)を除いての擧國皆兵主義」これでは「擧國解兵主義」だ。

愛情の錯覺

貴婦人など云ふ人達は犬を友達に有つことを好むが、下女を友達に有つことを嫌ふ。愛情の錯覺(さつかく)である。

糊口

一友嘆じて曰く『僕等の薄給では一家の口を糊するのみだ』と答へて曰く『一家の口を糊するのみで結構だ。妾(せう)や妓(ぎ)の口まで糊するの必要はあるまい』

自墮落

信念を有たぬ生活、散漫生活、注意の集中點のない生活を營む人は、退屈疲勞

煩悶疾病より外に得る所はない。

弱者

流行を趁ふことは弱者の自覺なり。

物見遊山

談話の要點を後廻はしにしてダラ〳〵と道行きを饒舌る人がある。こんな人は人生の道中を物見遊山だと信じて居る人だ。

精神と肉體

「健全なる精神は健全なる肉體に宿る」とは見當違いだ「健全なる肉體は健全なる精神の所產だ」。

他山の花

齒が痛む時は此の痛みさへ無くなれば嘸ぞ幸福だらうと思ふ。人々は常に得ることの出來ないもの丶價値を誇張する。

罪は汝に在り

貴女が誘惑されるのは貴女が惡いのだ。貴女が貴女の手さへシッカリ握つてゐたら無理に拔いてまで握手を求める男はさう滅太にあるものではない。

性欲教育

己れの心嚴肅なれば戀を語り慾を語るも何の痒しいところはない筈だ。これから先きの母親なんと云ふものは娘にも男の子にも嚙んで啣めるやうに男女の關

係などに付き注意すべきことは納得させねばならぬ。吾が子にそれを說くだけの心掛けの勇氣のない母親であつたら矢張り假面を冠つた親である。子供は敎育を受けた男女である、人情と理智とを嚙み碎いて話したらよもや解らぬ道理はない。過ちあらば罪あらば泣き出しもせう。こゝまで徹底した敎育をしなければ何で親の役目がつとまらう。

居睡

日本人は實によく居睡りをする、男も女も——汽車で電車で待合室で圖書館で或は人と談話をしながら居睡る、ダラシなく居睡る。如何に贔負目に見ても居睡は新興國民の象徵では無い。私は我國民の體質と精神とに精力の醱酵が缺乏

してゐることを痛切に感ずる。生の意欲が停滯し枯渴したかと疑はれるものがある。彼等には善くも惡しくも舊くも新らしくも生の意義が無い、自覺が無い。從つて生の自發的欲求も無ければ努力も無い。錢を得ては酒食を貪り、女を見ては巫山戲ることを思い、閑を得ては居睡る。口にこそ言はぬが「醉生夢死」は蓋し彼等が衷心の希望なのだらう。

廣告

娘の前にて音讀もしかぬる本に天下の名士の題字序文あり、千金丹萬金丹にも萬病治効ありと博士の證明あり。誇張は賣る者の慣用手段なり、買ふものにその覺悟なかるべからず。讀んで而して後に我の良心を痲痺せしめ我の趣味を俗

殺せしむるに驚き、服藥して而して後にその効驗の鼻の糞丸子に異るなきを悔ゆ。これ賣る者の罪にして又買ふ者の間抜けなり。

喜劍の耻

氣骨のある人間に最も警むべきことは、はやまらぬことだ。大石を辱めて後に泉岳寺で腹を切るやうでは全く無意義だ。

役所が凉しい

內地に於ける我官公衙學校の夏期休暇ほど無異義なものはない。役所の小使曰く『お宅より役所が凉しふ御座います』

國粹發展

國粹保存とは愚かなる議論である。宜しく國粹を發展せしむべし。

有用無用の人

仕事がなくて困ると云ふ人がある。身體が十もなくてはタラないと云ふ人がある。

金

不正直者に取つて金は敵の世の中であるが、正直者には、金は可愛い可愛い戀人である。親切にもして呉れる、優しくもして呉れる。

小さな人間

己れを割引して天下に提供し得ざる如き人は小さな人間である。

經驗の權威

經驗の權威は必ずしも其の度數ではない。生涯に一度しか經驗されざるものも其が人格の根柢を振動するものならば其の權威と價値は偉大である。修禪の徒が積日の苦心を經て機緣純熟の結果一朝皮果脱落する時、其の刹那の歡喜は一生涯を支配する、實に經驗の眞に人格的なるものは寧ろ繰り返されないのを本質とする。

教師

百姓を上手にすることの出來ない農業教師ではお話になりませぬ。

懺悔

我々は——兎にも角にも私は自分の過去を語るならば、それは悉く懺悔である。しかしそれは他人に對つてする懺悔では無い、自分に對つてするのである。私の周圍には私がこれまで交際した人には私が頭を下げて罪を謝するに足るほどの人は曾つて一人もゐなかつた。眞に善人と云ふものは見なかつた。私は自分の過去を悔ひ自ら責むるの餘り、他人の前に涙を以て懺悔したことがある、しかし彼等に捧ぐべく私の涙は餘りに尊きものであつた。我々は自己に對つて懺悔し、自己を責めつゝ其生活を改善向上せしむるより外に途は無いのである。

簾

自分の惡いことは自分にはよく分つて居るが他人にはわからないと思つて平氣

で居る人が多い。こんな人間が發明した物に簾と云ふものがある、内からは見えるが外からは見へない。

割增割引

割增して話すと人は割引して聞く、割引して話すと人は割增して聞く。

出過ぎ

あの孤兒が長々しい同情の强請文句を聲高らかに暗誦しなかつたら白銅の一枚も貰へたものを、あの原案提出者の長々しい演說がなかつたらあの案も無難に可決されたものを、あの妻君が怜悧しげに出遮張らねばあの男も人並の出世が出來たものを。

上下

人を推し上げやうとする者は自分も共に推し上がる。人を引下げやうとするものは自分も共に引下る。

病

人二氣あれば病むとは隨の王子の名言である。二氣になると病むが一氣では病まぬ。氣は一氣、心は一心。

秘密

七荷の嫁入荷物が重いか、彼女の胸に抱いて嫁ぐ秘密が重いか。

避妊

生殖は殘酷な義務だ。で神様は其代りに戀愛と云ふ褒美を與へて置かれた。すると科學と云ふ文明を發明した西洋人共は、其の殘酷な義務だけは御免を蒙つて御褒美の戀愛だけを頂戴しようとする。これが現代流行の避姙である。

奢侈贅澤

奢侈贅澤と云ふことは或意味に於て、社會一般人の共用する幸福快樂の資料を過分に横領しなくては出來ないものであるから、決して他人に喜ばれる筈のものでない。

謝禮

世間一般の謝禮は多くは過去の恩惠に對してするのではない。過去の恩惠に口を籍りて實は將來の恩惠を招かんが爲めである。

新舊道德

生活の重荷となる道德ではいけない。生活の力となり杖となる道德でなければならぬ。舊道德には重荷となるやつがあつた。新道德には縋つた杖のヘロヘロなのがある。

生活難

二人の教育家が耳語するのを聞けば曰く『子なきものは幸なり』だと。恐るべき生活難よ……

政治家

古の君子は其過(あやまち)や日月の蝕(しょく)の如し、過てば民皆之を見る、改むれば皆之を仰ぐ。今の君子は豈唯に之に順ふのみならんや、又從つて之が辭をつくる。と孟子に穿(うが)つてある。今の政治家は過があると無理に其の過ち通りにやり遂(と)げやうとする。やり遂げやうとするばかりでない。聖旨までを云々して自分はいゝ顔をしたがり人民を愚にする。

鼠の經濟哲學

或人の家では鼠(ねずみ)を飼(か)つて居る。毎日米を撒(ま)いては鼠にやる。來客が怪んで之を問ふものあれば主人答へて曰く「イヤ猫を飼へば年に三四斗の米が要(い)る、鼠を飼へば一二斗で足ります」

眞の名

生前一杯の酒か、身後千秋の名か、人は曰く酒の爲めにするも名の爲めにするも其の私を存ずるは一なりと。否とよ、身後千秋の名は其の最も善き意味に於て生前の聲聞(せいぶん)と全く相異る。所謂不朽の名なるものは固より其の私を存ずるものにあらず。聲聞は忌む、されど誰か眞の名を欲せざらんや。

春如海

大學に『心廣く體胖(たいゆたか)なり』と云ふ句がある。可い心持ぢやないか。

只是一事

王陽明が多病なる門人に一書を與へて『德を養ふと身を養ふとに只是一事』と

教へた。莊子にも、道を得たるものは中道にして夭せず、其天年を全うす、是知の盛なるものなりと說いてある。又曰く、白髮にして童顏なるは何んぢや。曰く道を得たればなりと。心を養ふものは先づ身を養ふ、身を養ふものは先づ心を養ふのである。

人間育

これが體育、これが智育、これが德育など、分類されては一個の人間育は出來ない。

自己の繰縱

反道德の思想は時々刻々に何人の心にも起る。此の低い考への起る點に於ては

多くの人にさほどの區別は無い。只起つた後の一瞬時に於ける自己の繰縱如何にある。大聖キリストも『サタンよ我が後ろに退け』と云つた。『ソール、ソール、何故爾は吾を迫害するか』とポールの高い人格の聲が、神の聲として其低い人格に響いた。

神と同居

昔の神はいざ知らず今日の神は吾人に斷食を要求しない、水行を要求しない、日參を要求しない、犧牲を望まぬ、御神樂も望まぬ。只要求は純一、眞一である。神は我が行く道を一歩一歩進み來れと命ずる。一日の中十分間神を禮拜して終日神を忘れることを不都合だとおつしやる。お前が飯を食ふ時も、寢る時

も、仕事をする時も一緒に居たいとおつしやる。

此方までお出で

手を把つて引張つて行つては駄目です、『此方までお出で』と手招きをするのです。

自ら取れ

教育と云ひ感化といふも、其の根本義に於ては所謂『授くる』の意でなく』『受くる』の意である。自己の缺點を悟らざる人卽ち覺醒の起らざる人は之を如何ともすることは出來ぬ、大聖十二の弟子の內にも尙ユダの如きものがある。道は——眞理は他へ授け得べきものではなく、自らの手を伸ばして取るべきもの

である。

友情

來られて迷惑を感ずるやうな時、友人に訪ねて來られるのは嬉しいものだ。病氣の時とか、夜遲くとか、貧乏してる時とか——。

愚

五分の隙も無い人は面白くないものだ。一つの愚は總ての智に點睛する。

人格の力

面と向つた沈默の裡に發射する人格の力に比べると筆や舌の力は無下に弱いものだ。

酒

酒は裏切をする味方である。興奮と愉快とを與へて、遂には失望と不快とを以て去る。

自然の愛

柔かい土にふれる足の快い感觸、温かい日の光に照される神經の歡び、勞働の後の輕い疲勞、その時の食事の美味さ、われ等は自然に歸りたい。

敵の價値

近頃のやうに親切の値打が安くて何處へ行つても安價の微笑が待ち伏せして居る時代には、一人の敵に對しても心底から感謝の意を表する價が有る。

自得

要は自得である。何をか浩然の氣と云ふ曰く言ひ難しは孟子の傑作だ。

馬に在らず人に在り

北清事變の折り各國の軍馬が天津に集つた。處が日本の軍馬だけは嘶く、蹴る、嚙むと云ふ工合で、列國の獸醫官などは、日本の馬は家畜ではない、正しく野獸だと云つたとの話である。嘶く、蹴る、嚙む、どうも其の病根は馬にはあらずして人にありそうだネと、其獸醫官の談。

中腰の國民

日本人は疊の上に生活する國民である。それでも現代の日本人は疊の上に坐る

ことを知らない、正しく坐ることを知らない。日本人にして日本の生活にすら徹底しないものが、西洋の生活に不徹底なのは無論である。現代の日本人は疊に坐ることも出來ず、椅子に腰掛けることも出來ず、要するに中腰の國民である。

超東西の生活

富を賤み黄金を賤みたる武士道の一元生活は既に過去のものとなつた。只管富を崇拜し、黄金を崇拜したる英米の一元生活も亦第十九世紀のものである。一切の富、一切の黄金、一切の物質を内化し、主觀化し、精神化し、精神一元の生活から更に突出して、一切の富、一切の黄金、一切の物質を追求して之を精

神生活の、目的理想を實現するが爲めに驅使するの生活が端的一元にして二元の生活、第二十世紀の生活、超東西の生活である。

人種的自滅

生殖なき性慾生活の時代が到來した。人類は今や生活の爲め無限に物質を追求する爭鬪に囚はれて、其の慰籍として性慾を玩弄し犬にも猫にも儼存する父としての本能も母としての本能も撥無され人種的自滅をなしつゝある。

夫婦

夫婦と云ふ道德的教典があつて男女の性慾が道德化され倫理化され義務化されてゐるから私通とか姦通とかゞ罪惡である。男女に嚴肅なる自由戀愛本能の抑

制があつて始めて生命の傳統がある。人生の時間的關係が維持される。

ドン底まで

歡樂を歡樂とする生活に於ては歡樂其物が歡樂でなくなる。何となれば歡樂を繰返すと云ふことは歡樂ではなくなるからである。酒を飲む、更に多くを飲まねばならぬ、更に酒では物足らなくなる、元日も飲む、二日も飲まねばならぬ、更に三日も飲まねばならぬ、更に行きつく處は耽溺である、糜爛である、苦痛である、衰滅である。

新舊偶像の入替

日本の所謂學者や識者達は、爭つて舊道德、舊習慣、因襲傳說の破壞を說いた、

舊國家の打破を說いた、偶像破壞の急先鋒を以て任じた。成程舊い偶像は破壞された。然し新らしい偶像が忽ち舊い偶像に代つて國家の廢墟を占領したではないか。新らしい偶像とは何んぞ、眼中唯利益あり、打算あるのみなる黃金の神が解放された女神を率ゐて闖入したことである。

物質の港

日本國家の船は歐化の大潮流に漂ふて何んと云ふ港に着いたか、曰く『物質の港』

危險思想

貧しき者の利己主義は危險思想であつて、富める者の危險思想は利己主義であ

る。

情性の涵養

道德は智に非ずして情なり、道德の人は智の人に非ずして情の人なり。孟子が惻隱(そくいん)の心を仁(じん)に近しと云つたのは此消息に通じたものである。惻隱とは氣の毒と云ふことである。人の不幸を氣の毒と思はざれば慈善の行ひは發せず、氣の毒とは卽ち情の働きである。人は其の智に於て人の不幸を知る、不幸の原因を知る、不幸の經過を知る、之を救濟するの手段を知る、智に於て缺くる所なきも、只憐憫の情動かざるに於ては、其の智は何時までも空しき智にして發して行となることなし。道德的修養は先づ情性の涵養を第一とすべきものである。

共犯罪

古の聖人は「君子は其の獨りを愼む」と云つた。吾々は心の中でいろ〳〵な不正な夢を見て居る。しかし之を實行さへせねば不正で無いなど、淺はかなあきらめをする。けれども實行せぬならば何も心を不正の夢で汚すには及ばぬでは無いか、と云つても其の夢を制することは出來ない。自分より外の何人にも分らぬと思へば誰でも心の中には人に語られぬやうな醜い夢を繰返して居る。けれど人に分らぬから構はぬと云ふのは、人さへ知らねば不正な事をすると云ふのと同じである。どうしても吾人は獨りを愼(つゝし)むの工夫がなければならぬ。思想は行爲の黑幕である、表面に立つて不正を行はずと雖もその共犯者たることに

於ては罪科を一にするものである。未だ不正の事を行はずと雖も、日々夜々吾人が心中に夢みる不正の淫慾、不正の陰謀は實に之れ未遂の大犯罪ではないか。神、我と偕に在らずと雖も、我れ我に耻ぢざるべけんや。

自愛

眞に自愛と云ふことを知れば、汝は健康であるべき筈だ。

娘の修養

娘の子には是非按摩術を習得させて置くことだ。嫁入してから得て意地の悪い姑をツママせる爲めに。

人民の歴史

日本には「人民の歴史」と名づくべきものがない。日本人民が豊臣秀吉を大將として大に朝鮮に戰ふたと云ふことはなく、豊臣秀吉が日本人を驅りて大に朝鮮に戰ふと云ふのである。大正以後の日本史をして願くば日本人民史たらしめよ。

運命

成功者は自己の力として運命を解釋し失敗者は運命の力として自己を解釋する者が多い。

サビ

古今獨歩の名人故攝津大椽の淨瑠璃を聞くと、喉佛に千年の苔が生えて其の苔

に觸れて出る聲がかくもオロ〳〵とサビを含んだものかと思はせたものだ。藝人でも學者でも詩人でも文人でも苟も名人と云はるる通達の人には一種のサビがある。サビは澤消しである、光彩は無い。金ピカや派手を喜ぶやうでは趣味を語るに足らぬ。

乃木式デモクラシー

我國に一人の平民化したる貴族として最も鮮かな色彩を見せた教育者が唯一人ある。それは伯爵乃木希典氏であつた。當時乃木大將のデモクラシーが如何に新味と感謝とを以て我社會に迎へられたかは今猶國民の記憶に新なる所である。吾々は財産の貴族、權勢の貴族、學問の貴族を餘りに多く持つて居る。若

しこれ等の貴族が乃木大將と共に日本的デモクラシーの精神を以て社會生活の上に實際的活動を試みるならば、それが我國文化の進歩の上に與ふる所のものは如何に大なるものがあるかを想はずには居られない。

欺されたり欺したり

米國の一宣教師が私に訴へて曰く、『私日本に來ましてから澤山欺されました、今も欺されます、同じ方法を以て欺されます、青年は神を信じます、熱心に神を信じます、そして勉強します、英語を學びます、そして宗教を止めます』と。私は反問して曰く『青年は貴方を欺すが貴方は神を欺すことありませんか』

苦しい時の神頼り

哲學者ピアスを乘せた船が折柄の颶風に危く見えた。すると日頃不信心な水夫どもか神々に祈禱を始めた。彼は之を制して曰く「靜かに〳〵平日て不信心な誰々が乘り合して居ることが神々に覺らるぞ」

獨逸人の勤儉

柴田宗敎局長の話である。私は戰爭前に獨逸を旅行したが其時に獨逸の田舍の停車場では汽車の着く少し前に電燈を明るくし汽車が出ると又元の螢火にするのを見て驚いた。獨逸人の勤儉は如何にも徹底したものである。

金持になる秘訣

或人が佐久間象山に金持になる秘訣を問ふた。象山答へて曰く、「足下小便をする時片足を揚げてなされよ之れ金持になる秘訣である」と。其人怪んで曰く「片足を揚げて小便をするのは犬畜生の眞似では御座らぬか」と、象山すかさず「それその犬畜生の眞似をするのが秘訣で御座る」

人間の眞僞

乃木將軍が大禮服を脱いで腹を切られた時、兵卒と同じ白木綿仕立ての襯衣を着て居られた。人間の眞僞は際どいところで發揮するものだ。

理想的復讐

韓信が齊王になつた後、往年耻をかゝせた市井の匹夫を召して、「公は壯士なり」と云つて之に二百金を與へてやつたと云ふ。その時の壯士の顏が見たかつ

た。蓋し韓信の復讐は理想的の復讐だ。

非デモクラシー

官廳や會社などに行つて見ると今日でも「高等官便所」だの「重役便所」などゝ云ふのがある。「糞忌々しい」とはこのことだ。

女尊男卑

閨閥は尻で光る螢閥に通じ『尻で光る』は『尻に敷かる』にも通じて妙ならずやと云ふものあり。

屁道德

自分が放つた屁は自分でも臭いが『ア、臭い』と自白する奴はない。さりとて『君子の屁は香ばし』などゝあたり憚らぬ不所存者もある。然しモジ〳〵していづれその中に消へるだらうなどゝズルを極め込むのが十中の八九だ。屁一つ放へるでも學ぶべきことはいくらもある。

蛔蟲退治

肛門から蛔蟲が出かゝると盥に微温湯を滿たし臀を捲くつて之に浸してゐると蛔蟲先生微温湯を肛門外とは思ひも寄らず。大腸海の如しとソロ〳〵出掛けて來る。蛔蟲退治には秘傳ぢやと云ふ。部下の惡黨や、獅々身中の蟲を退治するには此の傳を應用するがよい。

一座の馬の脚

我等が社會の組織の一要員たることは恰も名優團十郎の一座に、並び大名や、いらせられませうの腰元や、馬の脚が座員たると同じである。然し如何に馬の脚だと云つて胡坐を組んだり大きな欠伸をしたりしては名優の一座が滅茶々々になる。我等は馬の脚たりと雖も滿場の觀客を前にして舞臺に立つと云ふ自覺と緊張を失してはならぬ。

順自然生活へ

吾人の生活は自然に還らねばならぬ、而かも吾人が生活の必要は吾人をして相率ゐて自然に遠ざからしめやうとする。されば吾人は如何にかして此の逆自然の生活——文明を、順自然の生活——文明たらしむべく努力せねばならぬ。

定石を學べ

孔子曰く『吾嘗て終日思ひたりしが須臾の學ぶところに如かざりき、吾嘗て跂ちて之を望みしが高きに登りて博く見るに如かざりき、高きに昇りて招けば臂の長ぜるにはあらざるも而かも見る者遠く、風に順いて呼べば聲の疾きを加ふるにあらざるも而も聞く者著し。車馬を假る者足を利くするにあらざるなり、而も千里を致す。舟檝を假る者は水を能くするにあらざるなり、而も江海を絶る。君子の性異るにあらざるなり、而も善く物に假る也』と碁將棋を學ぶものでも、自分の心を師として苦思する者は却つて上達しない。定石を學び古名人の選びたる碁經將棋經を究むるに餘念なき者は其到達的確にして速い。年少客

氣、稟賦の偏癖を顧みず、天分を負み、自ら大にして自ら用ゐんとし我は吾が個性を尊むなどゝ云つて、我より古をなさんとするが如き學徒が近世殊に多きを見る。實に憂ふべき傾向である。

目的と方便

個人に就いて云へば健康であり長壽であり富裕であることは望ましい。國家に就いて云へば國富み兵多きは極めて緒構である。併しながら此等は要するに方便的價値である。個人の健康や長壽や富裕やは個人の最高目的を果すに重要なる條件と云ふに過ぎない。目的を愛する者は手段をも愛するは必然であるが、目的を忘れて手段のみを愛するに至つては、之れ自ら禽獸に墮すものである。

國家としても只單に富强を以て其價値を決定すれば米國は日本より遙かに優るものである。孟子が『王何ぞ必ずしも利を言はん、唯仁義あるのみ』と喝破したのは國家的功利主義に對する痛切なる鐵鞭である。吾人は先づ吾人の絶對價値として文化の理想を有しなければならぬ。

食物と胚種

西洋文明は胚種生長の爲めの食物に過ぎない。胚種は如何に微小なりと雖も胚種である。食物は如何に多量なりと雖も依然として食物である。胚種と食物と化合して二者何れにも非らざる中性的生物を生ずるものではない。日本精神が西洋文明を消化して偉大なる國民文明を形成する所以を知つて、更に此の國民

文明が内容上の價値と之を維持する國家の權力とに依つて世界化して世界文明となることを知らねばならぬ。

共鳴

或羊が小獅子を我子にして育てゝゐた。羊は小獅子の身體の異常に大きくなるのを怪しみながら眞の親子の如く育んでゐた。ところが或日小山の上に大なる親獅子が現はれて一聲高く叫んだ時に、羊は恐れて戰慄したが、小獅子は未だ曾て經驗したことのないやうな異樣の悅びを感じて一聲高く共鳴して一目散に其の親獅子の方に駈けて行つた。日本國民は永い間羊のやうな歐米の思想に育まれて小羊のやうになつて居る。何處かに獅子吼する巨人はないか、國民の皷動を一齊に高めて、民族的大覺醒を促すやうな獅子吼をする巨人はないか。

日本人の横着

忙しい電話交換局に時間を尋ぬる常習者が新橋局管内でも毎日四五百名あると云ふ。電話番號を帳簿で繰らず……繰るのが面倒だから態々局へ問合せた上で更に掛けるやうな横着者が、本局五百番の受持だけでも一日平均二千人に上ると云ふ。こんな横着は日本人の十八番らしい。

役盜

鐵道の役人が汽車の只乘りをする。町村役場や郡役所の吏員が地方税でかしわを食ふ。新聞記者が名刺一つで招かれぬ宴席に出遮張る。當人は之を役得だと

思つて居るが、それは役盜と申すものぢや。

白米は粕

粕と云ふ字は白米で、白米は米の粕であると玄米食奬勵の人達は云ふて居る。成程そうかも知れない。道理で玄米食を有効と信じても家庭に勵行するのに困難なのは何處の家でも妻君の不賛成であると云ふ。糟糠の妻と云ふから矢張り白米黨なのだらう。

森林業

森林業をやつてゐる友人の話に『私共が今伐つて居　樹は私の祖父さんが植えた樹だ、そして今私共の植えてゐる樹は私共の孫の代で初めて伐り出されるのだ』と、私は此話を聞いて大なる暗示を得た。現代人の事業はそれが精神的にも物質的に餘りに現金主義だ。今日主義だ。我等は今日の努力に對する報酬を孫の代に得んと欲する位の遠大の計がなくてはならぬ。我等は子孫の教養によつて、政治的にも經濟的にも、道德的にも、我國家を改造するの用意をしなければならぬてはないか。

舊魂新才

新らしい人の出現が頻りに要求されるけれども、今日迄に示された新らしい男や新らしい女の見本を拜見した所では、どうも新らしいと云ふだけで軟弱で困る。吾等は寧ろ古い堅い者の需要を痛切に感ずる。平安朝時代の人は和魂漢才

を理想の人物としたが、今日に於ては舊魂新才の人物が欲しい。新らしい世界的の知識を備へた日本氣質の人物が欲しい。

洗禮

此頃は身分があり、學問の有る人までが藝者などに戯むれるのを耻とせず、下がゝつた話をせぬと却つて僞君子だ位にケナされる。青書生などが「君は洗禮は濟んだのか」などゝ花柳病は誰でも一度は受けべきものと心得て居る。世は末である。

思想の出處

嘗て思想は頭腦から發した時代があつた。又嘗て思想が心臓から起つた時代があ

つた。今や思想は下つて胃袋から出る時代となつた。何んだ、そろ〳〵生殖器から出る時代が到來するだらう?といやモー到來してると云ふのか……

明日の日本

朝の電車に乘る毎に、ヘコタレた顔ばかりだと思ふ。朝の顔がヘコタレて夕方の顔はどうなるのだ。而して明日の日本はどうなるのだ。

別稱

當世では寛大は阿呆(あほう)、お人好(ひとよし)は間抜(ま)け、正直は馬鹿、親切は馬鹿正直の別稱、私は別稱を喜ぶ。

電車の忘物

東京でも、大阪でも、帽子を忘れる電車の客は無數に多いそうだ。しかし履物(はきもの)を忘れる乘客は一人も無いと云ふ。道理で電車道德は皆忘れるが、電車賃だけは感心に忘れない。高價な帽子や電車道德は忘れるが、安價な履物や電車賃を忘れないと云ふことだ。

慈善の心得

慈善と云ふことは之を受けるものに耻辱や反感を感ぜしめない樣に心掛けるのが最も肝要なことだ。ダイアモンドの指環をはめた手で慈善音樂會の切符を押賣したり、途中まで自働車を待たして置いて、貧民窟の視察をしたり、貧民の調査に巡査をして犯罪調べのやうな訊問的調査をさしたりすることではありませぬ。

亡びよ

彼等に神なし、靈魂なし、永久の生意なし、道德なし。彼等の不死不滅とは多くの妾(せう)を蓄へて私生兒を多數に出産せしむることなり。彼等のインスピレーションは是をウヰスキーに得よ、天國は新橋にあり、祇園にあり、飲め、食へ、唄へ、耽溺せよ、而して亡びよ。

物貰ひ

華族は皇室より貰はんと欲し、勞働者は資本主より貰はんと欲し、雇人は雇主より貰はんと欲し、子は父より貰はんと欲し、妻は夫より貰はんと欲し、官吏

は軍人は政府より貰はんと欲し、僧侶は檀家より貰はんと欲す。彼等の所謂幸福とは貰ふことか、彼等の生活は恩惠的施與によるものであるか。世に與ふることよりも貰ふことを幸福なりとするものが尙ほ他にも有る。曰く藝妓、曰く幇間、曰く孤兒、曰く乞食。

羨望と畏敬

實業家の如き直接生産業に從事する者は、其勞力が生産に寄與するが爲めに生産に依る利息が自己の所得となる。卽ち彼等の收入は勞力に對する對價である。然るに官公吏や軍人の如きは其報酬は勞力の對價に非ずして職責を果すに必要なる生活資料の支給たる性質を有する。之れ一國の大臣や甚しきは大統領までが、營利會社の重役に比して著しき薄給を以て甘んぜざるべからざる所以である。されど之が爲めに一は公人たり一は私人たるのである。而して又其成功せる場合に於ても私人は單に人の羨望の對象たるのみであるが、公人に於ては其の最善の場合に於て畏敬の對象たるのである。然るに官吏にして公人たる誇りを自覺せず、畏敬の對象たらんより羨望の對象たらんとするもの多きが爲め、官公吏にして收賄の動機をこゝに發し、或は勅任官の椅子を跳ね退けて鑛山屋の番頭などに成り下る連中が多いのである。

人間の官能

人間の官能は一番高等なほど空間的になつて居る。最も低劣な官能ほど實感的

になつて居る。腦は百年千年の昔でも考へる。眼は月を見る、星を見る、耳は十里の砲聲を聞く。鼻は隣家の御馳走を嗅ぐ。舌は肴を口中に入れねば味を感ぜぬ、而して性慾に至つては最も密接を要求する。之によつて人間の趣味や、道樂の高下を定めることが出來る。先づ女道樂男道樂と云ふのが一番下等で、其次は食道樂其次は匂ひかぎの道樂であるが、これは類が少ない、然し近代の文士などは荐りに女の匂ひだの、爛熟した匂ひだのと言ふからそんな道樂の人も無いことはなからう。次に耳の音樂である。次は眼である、美術の鑑賞などがそれであらう。學問や藝術や宗教などに沒頭するのは腦の道樂でそれが最も上等なのだ。

隱すこと

獸類は隱さぬ、野蠻人は少し隱す、文明人は最も多く隱す、神は全く隱れて分らない。進化とは隱れることか。

無想

山岡鐵舟が江戸城明渡しの際、西鄕との談判に於て何の腹案を持たなかつたとは有名な話であるが、之れ卽ち超然主義の一境である。一切の主義を超越してこそ之を自在に活用することが出來る。無意義と云へば誠に不用意の氣まぐれと誤解する人があるかも知らないが、無主義の眞相は劍に就いて云へば無想の劍である。眞の電光石火の劍は內充分するところあつて敵の虛を衝くこと水の

低きに流れるが如き無分別の劍である。敵手の虛を思慮分別して斬り下す劍は既に活機を逸した死劍である。

明鏡止水

心は明鏡止水の如しとは劍道の極意であるが、人の世に處すには須らくこの底の心懸が必要である。事に臨んでいろ〳〵な事を考へたり目論見したりするのは却つて邪魔になる、唯一切の思慮を捨て、妄想や雜念や靈智を曇らすことのないやうに卽ち所謂明鏡止水のやうに心を磨ぎ澄ましておくことだ。それで機に臨み變に應じて事に處すれば、恰も影の形に從ひ、響の聲に應ずるが如く方策立どころに辨ずるものである。

醇化せる個人主義

我々は西洋の衆俗化した個人主義を其まゝ受取らずして醇化(じゅんくわ)した個人主義と爲さねばならぬ。衆俗化した個人主義は自己を下して最愚者の水平に置くことに歸着する。醇化したる個人主義は自己を取つて最賢者、最强者、最優者最善者と同等の水平に達せんとする不斷の努力と爲る。故に衆俗化したる個人主義は唯物的個人主義となり、醇化したる個人主義は精神的個人主義となる。醇化したる個人主義は最も發達したる個人が社會民衆を率ゐるのであるから一種の英雄主義天才主義を迫出する。自ら下つて衆愚の水平に就くことなく自ら上つて衆愚の指導者となるのである。

西洋崇拜

西洋人が拒めば悪となり、西洋人が肯へば善となる。日本人の喝采は西洋人の喝采の反響である。西洋の流行を追はぬものは日本の時勢遅れである。新人はモミ上げの剃り方から、脚の振り出し方まで西洋人を眞似る。特に六七年前から我等は屢次奇怪なる小説を讀まされ、不思議なる芝居を見せられたが、若しその小説及芝居に沙翁の名前が無く、ゲーテの名前が無く、或はイブセン、シヤウの名前が無かつたならは天下果して此の如き奇怪なる文學を讀み、此の如きショウもなき芝居を見て、而して此の如き勿體振つた感心の仕方をする者があつたであらうか。日本人の西洋崇拜も難儀な役である。

黄金神崇拜

地獄の沙汰も金次第と云ふのは今日に始まつたことではないが、最近に至つて其の威力は加速度を以て進みつゝある。今や黄金の威力は萬能である。男子の威權も女子の貞操も、多くは黄金の手に支配さるゝ。殊に毫末の努力を代償とせずして成功を求め、何等の内在的價値なくして名譽を博せんとする人々は、一に黄金の威力に依賴するの外はない。斯くて揮ふべき一管の筆もなく、辯すべき三寸の舌もなく、用ゆべき經綸の才もなく、擁護すべき一片の丹心もなき滔々たる世人は、黄金神の前に膝を屈し、自己の節操を賣るに至るのである。

青年と共鳴

我と住む世界を異にする者に誰が其の心事を語るものがあらう。今の青年は親父にも舊師にも先輩にも自ら求めて敎を乞ふものはない。青年を誘導し敎育すると云ふことは既に青年の心事を了解して後の話だ。青年を壓伏し强制することを知つてそれに同情し共鳴することの絶えてない先輩長者は、青年と同じ世界に住む者ではないのだ。誘導も敎育も両者の間には內容の空虛な唯形式を遺すのみなのだ。試に全國の軍人分會や青年團を見よ。あれほど手を盡しても唯建設し得たものは其の形式だけである。其の個々人に付いては何等の交渉もない、何等の心的交渉がない。これ一に其の指導者が多くは青年の心事を了解せず、青年の趣味を解せず、時代的青年の思想を解せず、乾燥無味千遍一律なる

訓示や訓戒や强制によりて事を成さんとするが爲めである。共鳴が無くて自發があるべき筈がない。

强壓的概念教育

日本人にして忠愛的精神のない者は非國民の株である。これほど尋常に分り切つたことはないが、しかしこんな問題にも現代では隨分反對する傾向の者が現はれてゐるのは事實だ。そしてこれが必ずしも極端な社會主義者等にばかり限られてゐない。實に奇怪千萬のことだが事實は否定出來ない。そしてさう云ふ人々の內心に立ち入つて考へて見ると決して忠愛主義その物に反對してゐるではない。彼等でも乃木將軍の講談や、赤穗義士の浪華節でも聽くと矢張り涙の

一雫も落す連中である。それがどうしてかう云ふ矛盾を生じたかと云ふに、すべて強壓的な概念教育に對する反動に過ぎない。小學生や中學生にはまだ、どんな概念も未熟であるのは止むを得ないことだからと云つて、先輩や教育家がおのればかりで忠愛思想を持つてゐるかのやうな態度で被教育者に臨むから『また初つた』と云ふやうな反感を起さしめる。この反感ずくめで學校を出たもの等は社會に出てからも之を忘れることが出來なくなる。尋常一樣の教訓はどんな重大なのにせよ、さう概念ばかりでやかましく、注入出來るものではないたとへば我が國體を尊重させる爲めには賢明な教育ならば尋常に日本歴史を教へてゐてもいゝのだ。すると學生は常識の發達するに從ひ、周圍の氣分を取

りまとめるに從ひ、おのづから歸納的に國體の理解と信仰とが出て來る、かうして得た理解や信仰は自發的のものであり、その人の興味であり、生命である。例介ば小説を讀むにしても、舊式な作者がよく書いたやうに其の作の内容や筋をわざ〳〵ことわり乍ら進んで行くのでは小説の本當の興味は無くなつてしまう。しかし尋常に讀めて行く會話や事件の進行中に自然と重大な意味や變化が分つてこそ後さでもよく記憶され且つ自由な興味と尊敬とが永續する。教育もさう云う風に行くべきものである。

非國民

國家に對して否定的見解を懷いて居る利己主義の執着者はなか〳〵に少くな